恋するチキンソウル

mission No.149

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋するチキンソウル

【Ｎコード】
Ｎ３２５３Ｋ

【作者名】
ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｎｏ．１４９

【あらすじ】
ユウキは、憑依能力を持った非凡な高校生だ。しかし彼の周りはいたって平凡。隣の小さな幼なじみ。イケメンの親友。ロリコンの先生。ユウキは片思いを成就させるため、四苦八苦しながら成長していく。
全十五話構成なので、一つの映画を見る感覚で読んでいただけたらと思います。

プロローグ

憑依能力。系統的に言えば、憑依術。

憑依能力とは、術者が対象に直接触れることで術者の意識を対象に乗り移らせ、対象を術者の思うがままにコントロールできる能力。

それは、対象に意識があろうとなかろうと関係なく、強制的に対象の意識を押し退けることができる。また、解除の際、術者の意識は距離に関係なく術者の体へと戻る。

シャーマンやイタコなどが扱う、術者の肉体に死者の精神を乗り移らせる降魔術とは少し勝手が違う。

欠点は、術者の意識は対象へと移ってしまうため、術者は術中、文字通り「気を失った」状態になってしまうという点だ。

また、この世には憑依能力を代々受け継ぐ血筋が存在し、今でも一般人と何ら変わりのない生活を送っている。

彼らは先天的に憑依能力の才を持つが、決して初めから完成されたそれを備えるというわけではない。精神力を高めることで憑依能力は向上、進化し、徐々に高度な憑依技術を覚えていく。

憑依能力には幾つか種類がある。生命体に憑依する「生物憑依」

は憑依術の基本だが、その派生として、遠距離の対象に憑依する「遠隔憑依」や、複数の生命体に憑依する「多重憑依」、無機物に憑依する「非生物憑依」、意識を等分してその意識の一部だけを憑依させる「分身憑依」などがある。

ただ、利点の多い術ほど習得は困難であり、高い精神力を必要とする。難易度の高い憑依術を発現できないままに一生を終える者も少なくない。

ちょうど今、春の麗らかなな日差しの中、一人の青年が憑依術の基本である「生物憑依」を習得した。

ここから、一つの物語は始まる。

プロローグ（後書き）

初めて小説を書きました。めっちゃビビってます。キーボードを打つ手がプルプル震えてます。何せ見せたの友人一人なもんで…。感想とか書いていただけたら嬉しいです。

１／１５　暗中サーチ（前書き）

基本、地の文は作者視点ですが、たまにユウキ視点とかになります。
その辺結構曖昧な感じで切り替わりますが、その方が書く方として
は書きやすいので…。

1／15　暗中サーチ

「せ、成功だ・・・！」

「マジで！？　やったじゃん！！」

「おめでとう、ユウキ」

とある一戸建ての家の庭で、叫ぶのは梅野（ばいの）家の長男、ユウキ。
彼の容姿は中の上で、体型は中肉中背。ツンツン頭の黒髪に、遺伝的に細い眉毛。これといって突出した特徴はないが、しいて言うならば片目だけ二重ということぐらい。
ユウキは今、自分の弟と母親とともに一つの喜びを共有していた。

「やっと、やっと！　人体憑依できたぁっ！」

「じゃぁさ！　兄貴の左手のやつ、三日月になんじゃね！？」

「おお！　なんじゃねなんじゃね！」

『左手のやつ』とは、梅野一族に伝わる紋章のことで、ユウキの場合は左手の甲に、それはある。
基本目には見えないが、憑依能力を行使した場合と憑依能力が強化された場合に限り、青白い光を発しながら浮かび上がる。
梅野家の紋章は月の形を型どり、憑依能力の完成度が高ければ高いほど満月に近づき、満ちていくのだ。
さきほど、ユウキは弟の体を実験台にして、生物の中でも最高ラ

ンクである『人間』にとり憑く『人体憑依』に成功した。

「すげぇ！！」

「すげぇ！！」

ユウキとその弟は声の波長を合わせて叫んだ。ユウキの左手の甲にある紋章は淡青色に輝き、三日月へと満ちていく。

「あぁ早く爺ちゃんみたいになりてぇ！！」

「それはまだ早いわねぇ」

ユウキの祖父は憑依術の全てを網羅し、紋章は満月を示していた。祖父は一族きっての天才と言われ、ユウキの人生の先輩であり、目標であった。

「ところでユウキ？　喜ぶのもいいけど、学校とかで使っちゃダメよ」

「わかってるよ。大丈夫大丈夫！」

梅野家が憑依能力を持っていることは隣に住む山吹（やまぶき）一家すら知らない。それは広まると何かと不便で、何より科学者の研究の的になるのを危惧してのことだった。

ユウキの左手の甲から放たれる光は消え、月の紋章は肌色の中へと溶けていった。

ちょうどその時、梅野家と山吹家を仕切る木製の柵から、一つの頭がひょっこり現れた。

「あれ、ユウキだ」

「うおおっ！？」

「あら～ツバメちゃんじゃない。こんにちわ～」

「あー！　ツバメ姉だっ！」

その頭の持ち主は山吹家の一人娘、山吹ツバメ。

ツバメは、その小柄な体なりに頑張って家と家を分ける柵をよじ登り、ちょうどユウキの後ろから予告なしに声をかけた。

ツバメは、ユウキと同い年の十七歳で、ユウキとは世間一般でいうところの幼なじみなのだ。

「何何？　何してんの？」

「べ、別に大したことじゃねぇから。気にすんな」

「何言ってんの。さっき何か叫んでたじゃん。教えなさいよ」

「っおぅ・・・！」

ツバメはその小さい頭とは相反した大きな二重の目を側(そば)め、ニヒル顔でユウキの顔面を覗いた。その瞳には疑いの念をはらんでいる。

「えっと～、ほら、あれだよ。何ていうんだコレ！」

ユウキは二つの拳骨(げんこつ)を前に突きだし、手のひら側でその二つをくっつけるような形をつくる。これこそユウキが低い知能なりに導き出した必死の誤魔化しであった。

「ほら、いっせーの、いち！　とかいうやつだよ！」

「はぁ？　指スマ？　何で日曜の真っ昼間から家族ぐるみでそんなことしてんのよ。しかも庭で」

妙に不穏な空気が辺りを包む。そりゃそうだ、とユウキは自分の発言の不自然さを深く反省した。ただ、反省したところで空気が転換するわけもなく、時間が経てば経つほど淀んでいく。

しかし、助け船は以外と身近なところから現れた。

「あら？　母さんそれ箸挙(はしあげ)っていうと思ってたわ～」

「どっちでもいんじゃね。ってか、ツバメ姉も混ざってやろうぜ！けっこう盛り上がるよ！」

ユウキの弟の突き出した手には一枚の紙が握られ、その紙には対戦表が描かれてあった。どうやら即席で作ってくれたらしい。参加者の人名の筆跡からして、作成者はユウキの母のようだ。

ツバメにバレないように、ユウキは自分の弟と母に向けて手を合掌して、感謝を気持ちを送った。

（助かった・・・！）

ユウキの弟と母がユウキの辺鄙(へんぴ)な誤魔化しを誤魔化してくれた。

弟に誘われたツバメは少し悩んで結局、まぁたまにはそれもおもしろそうね、と言って、軽快に柵を越えて梅野家の庭の芝に飛び降りた。

Tシャツ、短パンにハイソックス。休日の日において、これがツバメの基本スタイルだ。今日もその通りの服装で、露わになった両

足は異常なまでに細く、着地の衝撃に耐えられるのか、と一瞬ユウキを不安にさせる。
後ろで二つに結び分けられた長い黒髪は太陽光を浴びても透けて茶色にならないほどの黒色だった。

「・・・何見てんの」

「えっ？　あ、いや、えっと・・・」

ツバメは前髪を整えながら、ふてくされ気味に言った。
ツバメの、少しつり上がったブラウンの瞳は破壊力抜群。実は幾人もの男のハートを粉々に砕いてきたことをユウキは知っている。
ユウキにとって、その美しさはまるで宝石のようだった。手に入れたいけど、あまりに高価すぎるから手に届かない。一生眺めていたいけど、自分とはつり合わない。不相応すぎて、自分が惨めになるほどだ。

「え～と、相変わらずチビだなぁって・・・」

「チビ言うんじゃねぇ！」

「いてぇっ！」

ツバメはハムスターのようなつり目をさらにつり上げ、ユウキの足を力一杯に踏んだ。ユウキの身長は１７０ｃｍだが、ユウキの肩ほどまでしかないミニマムなツバメでも、踏みつける力はかなり強力なのだ。

「ぐほおぉ・・・」

「ふんっ！」

ツバメは腕を組み、仁王立ち。見上げるユウキを見下ろしていた。

しかし、ユウキはそれに対して悪い気は起こさなかった。むしろずっと眺めていたいと思っていた。精神修行、勉強、部活等で汲々としたユウキの心を優しく包み、潤いを与えてくれる。たとえそれがどんなシチュエーションでも、物理的には痛手を被るようなものでも、ユウキは構わないのだ。

（でも、なぁ・・・）

ツバメのことを想うユウキの心の隅にはいつも、もどかしさが埃の如く絶えず存在し、いつの間にか積もりに積もってしまっている。

それは、心がチクリと痛むほどに。

「あぁぁぁ・・・」

「はっ、いつまで押さえてんのよ。ほら、早くやろ」

ユウキは爆撃された右足を押さえるのを止め、ゆっくりと立ち上がる。ユウキに襲いかかる痛みは、踏みつけられた足の指先一つだけではなかった。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

太陽が沈みかけた頃、指スマ大会で全敗したユウキは、自分の部屋でくつろいでいた。窓から伸びるオレンジ色のカーペットが、ユウキの部屋をその色で染めている。

そんな中、ユウキは一人考えていた。覚えたての憑依能力の有効活用法を。

（う～む・・・どうしたものかな・・・）

無論、邪（よこしま）な案もあったが、憑依能力は由緒ある聖なる力。受け継いだその力を汚すことはしたくなく、脳内会議でそれは一次審査の時点で却下された。。

ユウキは、父と母と祖父に意見を仰いだが、少なくとも自分にはあまり有力なものではなかった。

（父さんは憑依能力を受け継いでないから分からない。母さんは替え玉だっけ。友達に乗り移って代わりにテスト受けたとか・・・）

脳のはたらきだけは術者のそれが対象の脳に適用される。

例外的に、対象に術者の肉体的能力まで同調させる『完全憑依』という憑依術はあるが。

（で、爺ちゃんは完全憑依を使って代わりに戦争に出てやったんだっけか・・・）

祖父の若い頃の友人に、身体的に軟弱な男がいた。その友人が徴兵された時、誰もが彼は死に行くものだと思い、当の本人もそう思っていた。

そんな時、当時筋骨隆々だったユウキの祖父は『完全憑依』をその友人に使い、友人の代わりに戦い、その命を死なせなかった。

勿論、祖父も徴兵されていたわけだから、祖父は『完全憑依』と共に、意識を自分に残しておくため『分身憑依』を併用する必要があった。

また、体が他の人のもの、つまり対象のものだからといって術者

は安心できない。対象が死ぬとき憑依した状態のままだと、たとえ死んだ意識が一部分に過ぎなくても術者は、死ぬ。

（併用もすげーけど、何より持続時間が長すぎだろ・・・。俺なんて頑張ったって１０分が限界なのに・・・。つーか、他人のために命をかけられるとか、もっとすげー）

「あー！！　もうくっそ！！　何も思いつかねぇ！！」

ユウキは大きな独り言を呟いた後、深いため息をつき、改めて左手の甲を見つめた。

何も思いつかないまま、時間だけが過ぎていく。

そんな時ふと、ツバメの顔が頭に思い浮かんだ。ユウキはドクン、と心臓に太鼓を叩いたような衝撃を受ける。

「はぁ・・・」

ユウキは再びため息をつき、ベッドの上に飛び込むようにして寝ころんだ。

こういう気持ちは今に始まったことじゃない。かといって、いつからこうだったとか、明確な出発点を持ち合わせているわけでもない。

運命様は今の自分の姿を見て、青春だねぇと微笑むだろうか。何も行動にできず滑稽だと言って笑い転げるだろうか。

（う～ん・・・。考えても仕方ない、かな）

ユウキは憑依能力の使い道と、ツバメへの恋心とで板挟みになり、頭の中がゴチャゴチャと散らかり始めた。

ユウキは布団に潜り込み、目をつむり、頭の中にある一室の明か

りを消す。
外からは、消防車のサイレンが聞こえていた。
（ツバメは、俺のことどう思ってんだろ・・・）

１／１５　暗中サーチ（後書き）

読んでいただいて、というより私の作品に足を運んでいただいてありがとうございます。
まだ一話ですが、いかがだったでしょうか。読みづらかったりしたらスミマセン。

感想とか書いてもらえたらもう感無量です。
気をつけてはいますが、誤字、脱字の報告の方もお願いします。

2／15　思い立ったがグットディ

「で、その後何か進展あった？」

「いや・・・。特に何も・・・」

ワイワイと笑顔の溢れる2年2組の教室で、はぁ、と大きな溜息をついたのはツバメの親友、畠山ナナ。ユウキはいつも彼女に恋の相談にのってもらっていた。

「マジなにしてんの？　家も隣で、学校どころかクラスも一緒。部活まで同じなのにさぁ！　指スマ大会なんてしてる場合！？」

「なんかその・・・。ゴメンナサイ・・・」

「どうしてアンタはいつもここぞって時に臆病なんだろね～」

ナナは最後のねの字を、クレッシェンドに上げて言った。
ユウキはどうも肝心なところでチキンになってしまう傾向にある。ユウキもそれは認めたくないが自覚はしている。毎回チャンスを事ある毎に潰し、相手を振り向かせるようなアクションも起こせない。
ユウキはナナの熱視線から目を背け、受け流した。

「あっ。明日って開校記念日だよね？　部活あるの？」

「いや、部活は休みの日だが」

「じゃぁ明日、ツバメとどっか出かけたら？」

「いやいや！　いきなり誘ったりなんかしたらおかしいだろ！」

「ん～。それもそうか・・・」

ナナは眉間にシワを寄せ、何やら考えているようであった。ナナが両側頭部に人差し指を立て一休さんの如く思惑してから、１０秒ほど二人の間で沈黙が続いた。そして、閃いたようにナナは目をクワッと見開く。

「そうだ！　じゃぁこういうのはどう？」

「あい？」

ナナが提案したのは、至極単純な作戦であった。

まずナナが明日ツバメを遊びに誘い、どこかにでかける。そこで、待ち伏せをしたユウキが偶然を装って登場。その後、ナナがどこかへ消えてユウキがツバメとふたりっきりになる、というもの。

「ちょっと無理ねーか・・・？」

「どの辺で？」

「とりあえずお前はどういう体（てい）で消えるつもりだよ」

「あそっか」

またしてもナナは眉間にシワを寄せて悩み始めた。腕を胸の前で組み、目をつむって首を傾げている。そして勢いよく開眼した。今回はさきほどよりも時間は要さずに済んだようだ。

「急用ができたぁって言えばいいんじゃない？」

「んな安直な・・・」

その時、昼休みの終了を示すチャイムが鳴り響き、二人の作戦会議は強制的に終了させられた。

「まぁそういうことで！」

「そういうことって、おい！」

ナナはユウキの言葉を完全に無視し、立ち上がって自分の座席へと向かっていった。

その途中、座席に座っているツバメに話しかけ、何やら会話しているようだった。

（もう約束、しちまったか・・・？）

案の定この時ナナはツバメを明日遊びに誘い、承諾をもらっていた。このことをユウキが知ったのは、授業中にナナから回ってきた手紙を見てからだったが。

その文章のノリからして、ナナはこの状況を楽しんでいるようにしか見えなかった。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

明日決行となった『偶然出会ってそのまま二人きり』大作戦。

この作戦、詳細はというと、まずツバメとナナが映画に向かう。ここで重要になるのは、ナナが二人分の前売り券を買ってしまっていることだ。
映画の前に、偶然を装ってユウキが参入。ナナは急用ができたといってその場から立ち去り、その前売り券を二人、つまりユウキとツバメに渡す。こうすれば、二人で映画を見るしかなくなる。
もちろん見る映画は純愛ラブロマンスで、二人の間も急接近、というわけだ。

「んな簡単にいくかよ。ってか、前売り券とかどうすんだ」

「もう持ってるよ～ん。いやぁ彼氏と見ようかなぁ～って思ってたけど、二人のためだもん」

「マジスか・・・」

「大丈夫だって！　それにもうツバメ誘っちゃったし、なるようにしかならないよ」

まぁ、そういうことで！　と会話を断つのに非常に便利な台詞を残し、ナナは教室を出た。ナナは帰宅部のためこのまま下校だが、ユウキは部活へ赴かねばならない。

「お～いユウキ。早く部活行こぅぜ」

「ん？　あぁ」

ユウキに後方から話しかけたのは、ユウキの親友、音羽（おとはね）レンジ。レンジもユウキやツバメと同じ、陸上部に所属している。
とはいっても陸上部の部員はユウキ、レンジ、ツバメの3人しか

いない。

「レンジ、お前また告られたんだって？」

「まァーな」

レンジは、男のユウキが納得するほどのイケメンで、性格も良く、根性もある。足も速く、１００メートル走では県トップレベル。

レンジ曰く、女は目で殺せるらしい。

「でもあんま好みじゃなかったからさァ」

「贅沢野郎め・・・」

「なァに言ってんだ。お前だって、ツバメちゃん以外に告られたって嬉しくないだろォ？」

「ばっ、バカ野郎！！」

ユウキの顔は火照り、体温が急上昇した。ふざけ半分でこのピュアな男の純情を弄ばれるのは、とても癇に障る。

レンジは赤くなったユウキの顔を見て、狼のように大きく鋭い目を三日月状にして笑った。

「ははっ、何照れてるんだか」

「ちゃかすなこらぁ！！」

レンジはポケットに両手を収めながら逃走。ユウキはその後を全

力で追いかけた。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

「ふぅー」

ユウキは疲労にまみれた息を自室に垂れ流した。今日もツバメにいいところをみせようと張り切りすぎたのかもしれない。

「明日かぁ・・・」

ユウキはベッドに仰向けになるように倒れ込み、二つの手のひらの上に頭を重ねた。視界に映るのは少しくすんだ白色の天井と、天井に設置された明かりだけ。

（ん・・・待てよ・・・？　もしかしたら・・・）

ふと、あることを思い出した。
そしてそこから、あることを思いついた。

（いや・・・少し無理があるかも・・・）

突然提出された書類に、ユウキの脳内会議は大波乱となっていた。

（でも・・・いけるかも・・・。これなら・・・）

ユウキは今まで、自分からこれといった行動は起こせなかった。
今回の二人きり作戦もナナあってこそなのだ。

だからこそ、突如脳内に出現したこの提案を行動に移すことができたなら、少しはツバメとの関係に変化が起こるかもしれない。そう信じてやまないユウキは、少し強引でも実行することにした。
ユウキは、部活のせいで枝のようになっていた足を床につけた。そして木製に見立てたプラスチック製のドアを勢いよく開け、階段を降りる。

「母さーん！！　ちょっと聞きたいんだけどー！！」

3／15　大根アクター

火曜日。本日は開校記念日。ユウキ達の通う高校の生徒達がここぞとばかりに遊びへ出かける。
しかし、一応は進学校であるため、今日という日を勉学にあてる者も多いはず。

「じゃぁいってきまーす」

「いってらっしゃーい」

ユウキは金色のメッキが若干はがれた縦長のドアノブを握り、少し重たいドアを開けた。
空は雲一つない快晴。風はやさしく吹き、ポカポカと太陽は大地を暖めている。天気予報によると日中は十五度を越えるらしく、ここ最近では珍しいことだ。

「あんなお洒落して・・・。どこ行くのかしら」

「デートなんじゃね」

「あらあら」

少し季節が早い気はするがユウキの弟はアイスバーをくわえ、笑いながら言った。
半分冗談だが、半分は本気だった。今まで見たことのないような服を着たユウキは、弟に少なからず何かを感じ取られていたようだ。

「昨夜のあれもそういうことかしら・・・」

ユウキの母は手のひらを頬に当てて一人呟いた。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

ユウキは約束の曲がり角に着いた。あとは歩いてくる二人を待ち伏せるだけだ。

ユウキは、わざと緩めてあったネクタイに手をかけ、皮のジャケットを煽って体周りの空気を循環させる。ワックスで固められた前髪を指先でいじり、ジーパンの位置を少し下げた。

（上手くいくだろうか・・・）

ユウキは一抹の不安を覚えながら、左手の甲をさすった。

太陽は徐徐にその高度を上げ、日陰が減ってきた。そろそろと思い始めると、二人の凸凹コンビが歩いてくるのが見えた。

（来たよおい・・・！）

こちらに歩いてくるその二人は、間違いなくツバメとナナだった。

ナナは、胸元にボタンのあるオレンジ色のシャツにカジュアルな白のジャケットを重ね、ストレートタイプのパンツを着用。ブーツを履いている。肩にかけた小さな鞄は全面ピンク色で、銀色のハイビスカスがあしらってある。

（流石彼氏持ち・・・お洒落だ・・・）

対してツバメはセーターのようにだぼついた長袖のパーカー一枚。藍色の袖は長すぎてツバメの手が完璧に隠れてしまっているが、ゆるゆるのおかげで体の起状は隠せている。
下はベージュのショートパンツに黒のハイソックス。ハイソックスには銀色の星の点描が幾つもあった。そして、底が妙に厚い靴を履いている。首もとにはネックレスがあり、太陽光を反射して輝いていた。
髪は二つに結わえ、休日のツバメの基本スタイルだ。

（うわぁ、ちっせー。ってか服のサイズ合ってない気が・・・）

でもかわいい、と付け足しユウキは二人を覗く頭を引っ込めた。
そして深呼吸。
今日で何かが変わるはずだ、結果が出なくても行動にしたことに意義がある。そう自分に言い聞かせながら。

「やっぱあれはシチュー彗星だよー」

「違うよナナ。あれはカレー彗星・・・。あれ？　違うな」

「よ、よぉ！　き、き、キグウダナ！」

ユウキはがちがちに固まった腕を少し挙げ、ひきつった笑顔で二人の会話に割り込んだ。
ツバメは、いきなりの幼なじみの登場に少し驚いた模様。
ナナはナナで、ユウキの演技の下手さに軽い驚愕の表情を浮かべた。

「やや！　梅野（ばいの）君じゃないの！」

「あれユウキ、こんなとこで何やってんの」

ナナは用意してあった台詞を叫んだが、ツバメは偶然友人に会ったときの、もっともらしいことを言った。

「お、俺は、ちょ、ちょっとっやや、やぼうよ、やぼよ用がな？あ、あつる」

「ユウキ頭大丈夫？　何言ってるのかサッパリなんだけど」

普段からこんなではない。

ツバメに好意を抱いてるとはいえ、自分でも恥ずかしくなるほどまでに呂律が回らないわけではないのだ。ある程度緊張はあっても、視線があちらこちらに泳いでしまうことは今まではなかった。

ただ、今回は特別だから。裏の裏をかかねばならないから。

「で、でもほんと奇遇だね！　こんなところでバッタリ会うなんてさ！」

「そそそそ、そうだな！　キグウダナ！」

「ユウキ、暑さで頭イかれちゃったんじゃない？」

ツバメの毒舌には慣れているつもりであったが、今日のユウキはツバメの抉るような発言が冗談に聞こえなかった。勿論ツバメは冗談のつもりで言ったのだろうが。

ユウキは自分の気持ち悪くひきつった笑顔の醜さを認めざるをえなかった。

ツバメは片方の目を半開きにし、他方の目を大きく見開いて、ユ

ウキの顔を覗いている。

「あたし達はさー、これから映画に行くんだけどさー」

ナナがユウキを見て、事前に打ち合わせてあった台詞を述べた。

この後は、ユウキが自分は暇であることを二人に伝え、ナナに急用が発生し、ユウキとツバメの二人きりで映画、という手筈だった。

「これなんだけどー」

ナナが映画の前売り券をユウキに向けて提示した。そのチケットには『運命のラプソディー』というタイトルが入っている。

そして、この後のユウキの台詞は『いいなー俺暇なんだよねー』である。

その予定なのだ。

しかしそれは予定であって、それ以上も以下もない。

「ま、まじで？　実はさぁ・・・」

ユウキは作りものの笑顔を全力で振りかざし、予定とは少し違う台詞を口にした。

そしてそこから、ユウキだけの『ふたりきり大作戦』は幕を開ける。

「お、おお俺も、あ、あるんだよねそれ」

ロボットのようにカクカクとした動きで、ユウキがポケットから取り出したのはナナが提示してみせたチケットとまったく同種の前売り券。つまり、この場には今『運命のラプソディー』が三枚あることになる。

「え・・・？」

ナナは小さい声で呟いた。

不測な事態は想定していたつもりだったが、まさか作戦の実行者サイドからそれが起こるとはまったく思っていなかった。

完全に予定外。予想外。

「なんだ、時間も一緒じゃん」

ツバメがユウキのチケットを見て、上映時間を確認してそう言った。

「一人で見る気だったの？」

「え？　あ、ああ。まぁ、そうだけど・・・」

「悲惨・・・！！　寂しすぎる・・・！！」

「うっせ」

ツバメはわざと大きく仰け反ってリアクションをとった。

実はというと、ユウキは昨晩このチケットを母から譲ってもらったのだ。

ユウキの母は懸賞で不本意ながらもこのチケットが当たり、近所の人に譲ろうとしていたのをユウキは昨夜思い出した。

そこからもとよりあった作戦とは違う作戦を立て、現在実行中。

「彼女とかいないの？」

「いねーよ！　悪かったな！」

できればお前とふたりきりで。そう思ったが、今のユウキにはそれ以上に優先されるべきことがある。

「でも、一人で純愛映画？　考えれば考えるほどウケるわね・・・！！」

しまいには笑いだしたツバメ。お腹を押さえて含み笑いしていた。ユウキはそれを見て心の底からこみ上げる負の感情を抑え、一つの提案をした。

「あ、そそうだ。その、お、お前らと、い、一緒に、見ても・・・いいか？」

「う～ん、いいんじゃない？　どーせ時間一緒だし。ね、ナナ！」

ツバメは少し頬を桃色に染めて、終始笑顔でナナに聞いた。

「え？　あ、ああ。そうだね！」

ナナは我に返ったようだった。

ユウキとツバメが会話していた間に、ナナはユウキの意図を考えていたのだが、答えは一向にして分からなかった。

なぜわざわざ三人になるような行動に出たのか。

ナナはそこに何かしらの策略があり、ユウキにとって有意義な利益があると考えた上で、自分のチケットを破ってでも強引にその場から消えるような行動には出れなかった。

「マジ？　よ、よし！　じゃぁ行こうぜ！」

ユウキはこの状況に慣れたからか、一仕事終えたからか、口調が落ち着いてきた。とはいってもやはりツバメを前にすると、相変わらず心拍数は容赦なくそのペースを上げる。

「ナナ？　どうかした？」

「ん？　いや、どうもしないよ！」

「そう？　それならいいけど」

ユウキを先頭にして、三人は映画館へと歩を進めた。
その途中にナナはユウキに作戦変更の意図を聞こうとしたが、ユウキは先陣を切って歩いているため、なかなかに質問をし倦ねていた。

（どーゆうこと・・・？）

疑問は疑問のまま、気づけば三人は映画館に着いていた。

４／１５　空中キャッスル（前書き）

お気に入り登録をしてくれた方へ。本当にありがとうございます。これを励みに、日々精進していこうと思います。まだまだ未熟で至らない部分はありますが、これからも恋チキをよろしくお願いします。

4／15　空中キャッスル

「僕は、君を愛してる！　キャサリン！」

「ダメよダニエル！　私には、もう父が決めたフィアンセがいるの！」

「それでも、それでも構わない！　もうほんとに！　ほんと構わない！」

大スクリーンに大音量、フワフワのシートやポップコーン。
どれも映画館ならではだが、ユウキは少々の違和感を覚えていた。それは見ている映画が純愛ラブストーリーだからにほかならない。
ユウキが今まで見てきたものといえば、ど迫力のアクションムービーといった、大スクリーンをフル活用したような作品ばかり。
これを前のめり気味に、まじまじと見ているツバメの気が知れない。

（眠ぃ・・・。そろそろかな・・・）

ユウキはおもむろに立ち上がる。そしてナナに向けてお前もこっち来い、と軽く指を引くジェスチャーをした。
ユウキの隣にいたナナはそれに気づき、少しの時間差で立ち上がった。

「ちょっとあたしもトイレ」

「うん・・・」

今のツバメには、左横の二人がほぼ同時にお手洗いに行くことに疑問を呈しはしなかった。そのくらい映画を食い入るように見ている。

ユウキは音響世界を抜けだし、閑散としたロビーに出た。世間的に言えば今日は平日だから、館内の殺風景は何ら不思議なことではない。

程なくしてナナが現れ、低級悪魔のような、凶暴性を備えつつもかわいらしさも兼ねている表情でユウキに近づいた。

「ちょっと！」

「やっぱ、そういうリアクションになるよな」

二人はトイレ付近にいたが、勿論トイレに来るために映画の席をはずしたわけではない。

ユウキはナナに変更した作戦を説明するため。ナナはユウキに変更された作戦の意図を尋問するため。

「どーゆうこと？　なんで計画通りにしなかったの？」

「え～っとぉ・・・」

ナナは問いつめた。これでしょうもないことを言ったら一発パンチを食らわせるつもりだった。何せ、ナナは本来彼氏と見るためのチケット二枚を無駄に使ってしまう形になるからだ。

「いいか？　これはな・・・」

ユウキは口に手を添え、ナナだけに聞こえるように耳元でしゃべ

ろうとした。ナナはそれを真剣に聞こうと、耳に神経を集中する。
しかしそのとき、ナナは気づかなかった。
ユウキの口の方にある手とは逆の手が、ナナの後方で振りかざされていたことに。
その手の甲は青白く輝いていた。

「うっ・・・・！」

ユウキは掲げた左手を振り降ろし、ナナの後頭部と手のひらを接触させる。その刹那、『ユウキが』骨抜きにされたように倒れた。

（憑依・・・成功！！）

今ユウキの意識は完全にナナの内部へと入り込んだ。今のナナはユウキだった。
胸の辺りがきつく、下半身の異物感は皆無。仄かに香水の香りがするのはいいが、髪の毛がうっとおしく感じるし、声帯の高さには到底慣れる気がしない。

「やっぱ変な感じすんなぁ」

ナナの体をしたユウキは、自分、つまりユウキ本体の脇を持ち、引きづりながらボヤいた。なにしろ、自分がそこにいるのだから。
ナナは周りを警戒しながらユウキの体を男子トイレの個室へ置き、鍵をしめる。そしてナナは個室の壁をよじ登ってその外部へ出た。

「よし・・・いないな・・・」

ナナは辺りを注意深く見て人がいないことを確認すると、急いで男子トイレを飛び出し、館内のロビーへと出た。

「急がないとな・・・」

ナナの体を借りたユウキは急いでツバメの隣へと急いだ。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

「あれ、ナナ・・・？」

「え？」

「そこユウキの座席だよ？」

ナナはツバメと一つシートを挟んだ二個となりの座席に座ってしまっていた。あそっか、とわざとらしく答え、ナナはツバメの隣に腰を下ろした。

「なんか、ユ、梅野（ばいの）君、帰るって」

「・・・あそう」

あまりに淡泊な反応に、ユウキは心臓に釘を打ち込まれたように胸が痛んだ。帰った理由も用意していたが、ツバメはそれを聞こうとする素振りも見せない。

（こんなもんか・・・）

ユウキの目的。

二人きりよりも、少しいい雰囲気になることよりも、ユウキにとって大切なこと。
それはツバメの、ユウキに対する気持ちを知ることだった。
ナナから何度かそれを聞いたことはあるが、どれも曖昧で、普通だとか、ただの幼なじみだとかであった。

（でも、今度こそ・・・！）

ユウキはナナの体に憑依して、直の本心をツバメから聞き出すつもりだったのだ。
もしかしたらナナはユウキに嘘の情報を教えているのかもしれない。そうだとしたら、それはユウキに恋を諦めさせないための配慮になるだろうが、ユウキにとってそれは少し迷惑だ。

（本当のことを、聞き出すんだ・・・！）

ツバメが自分のことを嫌いと思っているならば、それでユウキの恋は終了。さっぱり諦めるつもりだった。つまり、ユウキの恋心は今日限りで潰えることになるかもしれないということ。
それでも、本当にツバメはナナの言った通り、ユウキに何も感じていないのか、ユウキは確かめたかった。

（そのためには、まず睡眠をとらないと話にならねー）

ユウキの憑依持続時間は１０分。つまり、映画が終わるころには憑依が解けてしまう。だから、ここで睡眠を取る必要があった。
対象に憑依した状態で眠ると、その時間帯は憑依における継続時間にカウントされないどころか、睡眠時間１時間につき１５分ほど継続時間を伸ばす効果がある。

（これで眠れば、起きたときの持続時間は・・・）

２５分。ツバメの気持ちを聞き出すのには十分な時間。

今見ている映画は、ユウキにとっては退屈なそれでしかない。そのため、ナナの体のユウキはすぐに眠りにつくことができた。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

「え～？　見てなかったの？」

「ごめんごめん。ちょっと寝ちゃってさ～」

２人は映画館を離れ、車が行き交う街路の脇にある、歩行者用通路を歩いていた。

ユウキは自分の体の安否を心配しつつ、ツバメを願わず見下ろし加減に見つめた。

２人きりで歩くのはひどく懐かしく、小学生以来のような気がする。ただ今のユウキの体はナナだからそれが成立するかは今一分からない。

「でも残念だったねぇ梅野君。途中でドロンするとかさ」

「うちはアイツが途中で消えても一向にかまわないし」

「ははっ。そう、なんだ・・・」

「どんな理由であれ、うちが関知するところじゃないし。というか、そもそも知りたくないし。あいつがいなくなっても、まぁったく興

味もないし！」

ユウキは自分について話題をふってはみたものの、どうもさっきからずっと愚痴を聞かされている気がする。

その内にツバメは言いたいことを全て吐き出し、スッキリとしたような面持ちで今までの辛口な口調とは違う、優しい口調で続けた。

「じゃぁこの後どーする？　ナナ」

「え～っと」

ユウキは慣れない女言葉に四苦八苦しながら、なるべく足を大きく開かないように心がけていた。しかし肩にかかったバックが何度もずり落ち、その度ごとにバックを掛け直す。

（なんでこんな重いんだ・・・？）

バックの中身を持ち主の了承なしに開け放つほど、ユウキは不作法な人間ではなかった。ただ、その重量から少なからず中身が気になっているのも事実。

「バッセン、とか？」

バックのことばかり考えていて、ユウキは素の自分を出してしまい、しまったと思った。普通、帰宅部で彼氏持ちの女子が、時間が空いたからといってバッティングセンターに赴くだろうか。

ついいつもの癖で出てしまった自分の言葉を自分で呪った。

「ぷっ。ふふっ」

「ん？　ツバメ何笑ってん、るの？」

口からいつもの男言葉が漏れてしまいそうになった。

そんなユウキ基ナナをよそに、ツバメはニコニコと、ユウキが見たことのないような、猫の幸せそうな寝顔のような笑顔をしている。

「何か、ユウキみたい・・・。ふふっ・・・」

「ユウ、梅野君・・・？」

突然、ツバメの口から自分の名前が出てきて心底驚いた。それは良いことなのか悪いことなのか、はっきりはしない。

ただ今はツバメのフニャっと砕けた笑顔を見続けていたい、そう思った。そうやって思えた。

「うん。ユウキね、小さい頃、暇があったらバッティングセンター！　って言って、うちがいつも付き合わせられたの」

「へ、へぇ・・・」

「そういえばその時貸したお金、まだ返してもらってないな」

自分のいない場でツバメが自分のことを話していることが、ユウキには嬉しかった。それ以上に、小さい頃の自分を覚えていてくれたことが、ユウキの心をこの上なくハッピーにさせた。

と同時に、これはチャンスだと思った。

「えーと、ツバメは梅野君と幼なじみなんでしょ？」

「そうだけど・・・」

「ツバメは梅野君のこと、ど、どう思ってるの？」

ツバメの顔は先の天使の微笑みとはうって変わって、捕食者を警戒する小動物のような表情を浮かべ、ナナの衣を被ったユウキの目を見た。

「ナナまたその質問？」

「へ？　また？」

また、とはつまり一度は聞かれたことがあるということ。ただこれは一度きりではないようだ。何度もしつこく聞かれたようで、疲れと呆れ、それと少々のダルさがツバメの表情から見てとれた。

「何度も言うけど、ユウキとは何もないからね」

これまでは一応予想通り。ナナが言っていたように、フツーというやつだろう。だが、決してここで引き下がるわけにはいかない。ナナの作戦に抗ってでも実行した作戦だ。

もっと問いつめなければなるまい、とユウキは焦燥感にも似た感情を抱いた。

「え～ほんとに？」

「ほんとだってば」

ユウキは少しずつだが女語に慣れてきた。

そして会話が自然にできるようになると、相手の細かい表情を読みとるだけの余裕ができてくる。今のツバメは、ユウキが見たこと

ないような自然体で、とても優しい目をしていた。それはおそらくナナと二人でいると思っているからだろう、とユウキは思った。

「じゃぁ、梅野君を動物に例えるなら？」

「ど、動物・・・？」

これは昨夜、布団の中で考えた質問。我ながら阿呆な質問であると思う。

しかし、この質問は初めてだったのだろうか。ツバメは驚いたようにユウキ兼ナナの目を見た。そして考える間もなく。

「ふむ、チキンだね」

「ち、ちきん？」

ユウキの頭に浮かぶのは、鶏冠のついた、三歩歩いたら忘れるといわれる鳥類。などではなく、弱虫、臆病者、腰抜け、ビビりの類。

「それは・・・また、どうして？」

ユウキはある程度の中傷と罵倒には耐性ができていたが、精神修行を積んでいる身としては、その表現は酷くユウキの心を抉った。しかしユウキは必死にナナの女らしい顔を形成しつつ、チキンと認識されている由縁を尋ねた。

「たしか小五のころだったかな。下校中に野良犬を見つけた途端、うちのうしろに隠れて、ツバメ助けて～って」

あぁそういえば、とユウキは思った。

あの頃はよくツバメと一緒に帰っていた。ツバメは、成績優秀・運動神経抜群の美少女というような位置にいて、小学校での評判が頗る良かった。
だから、ユウキにとってはその下校が一種の自慢になっていたのだ。
そんな気持ちもあってか、ツバメに依存していた部分もあったように思う。

「あと、中二の時に夏祭り誘われて行ったんだけど、そこでユウキがお化け屋敷は無理っていうの。結局入ることになったけど、その間ずっとうちの後ろにいてさ、暑苦しかったの覚えてる」

夏祭りに行ったのは、ユウキとツバメを含め男女3人ずつだった。その中には超絶イケメンのレンジもいて、そのレンジがお化け屋敷に行こうと提案したのだ。それも男女二人のペアで。
ツバメ以外の女子二人はレンジ目当てらしかったので、レンジと執拗に入りたがっていた。
そこでツバメがユウキと一緒に入ろうとしたのだが、ユウキはそこで石のように動かなかった。やっとのことで入場しても、終始目を瞑ったまま小さなツバメの背中に身を潜めていた。

（確かに・・・あれはない、よな・・・）

「まったく、意地を張ってでも女の子の前に立ちなさいよね～」

「ゴメンナサイ・・・」

「？　なんでナナが謝るの？」

「えっ？　いや、何でもない！　何でも！」

「変なの」

ツバメの独り言がまるでユウキ本人に話しかけているようで、一瞬脳が停止し、自分の体がナナであることを忘れていた。

「あと、入試の結果とか怖くて、見るのに三時間かかったとか」

中学のころ、あの時は必死だったのをユウキはよく覚えている。自分より遙かにレベルの高い高校を狙っていたからだ。理由は至極単純。

ただ、ツバメと離れたくない、それだけ。

ユウキにとってはそれで十分だった。

端から見れば本当に馬鹿げているように見えるかもしれない。しかし恋は盲目というもの。ユウキは無謀と言われようが、他の高校を薦められようが、模試の結果がD判定だろうが、かまわず突っ走った。

入試の結果を見るときに感じた異常なまでの緊張は、今でも鮮明に頭の中に蘇る。

何せ、ここで思いをよせる人と高校生活を過ごせるどうか決まるのだから。

しかしそんな純情も、ツバメにとっては馬鹿な奴、チキンめ、などといって一蹴してしまうのか。ユウキにはそれがたまらなく悔しかった。

「あれじゃ絶対女の子に告白とか無理だよね。チキンだから」

「うん・・・そうだね」

言われなくても分かっている。

どんなに精神修行を積んでも、弱虫な自分が消えていないことにも薄々気づいている。いざというときに限って足が震える。肩が竦む。肝が冷える。

ツバメに告白をしようと考えて何度失敗したか分からない。

一度はゴミ箱を失敗作のラブレターで一杯にしたときもあった。

時が経てば経つほど、伝えづらくなってしまっていたのだ。

「ツバメ、じゃぁ一ついい？」

「ん？　何？　急に畏まっちゃって」

そろそろ憑依が切れてしまう。ユウキは最後に、核心に迫る質問をツバメに投げかけた。

「もし、梅野君が告白してきたら、ツバメはどうする・・・？」

ツバメの目が大きく開き、それと同時に微かにだが頬を赤くした。ナナはかつてにこの質問はしてなかったのか。

ツバメは高校でもモテていて、何気に結構な数の告白を受けている。

結果はそれぞれ。

バッサリ振る場合もあれば、悩んだ挙げ句に承諾する場合もあった。しかし付き合うことにしても、すぐに別れていたが。最も長続きで一ヶ月。

（俺の・・・場合は・・・？）

幼なじみというスキルだけで太刀打ちできる相手でないことはわかっていた。

それでも、確かめたい。ツバメの気持ちを。

それでも、信じたい。自分に残された可能性を。

「ん～。そうね、うちだったら・・・」

5／15　屋烏ラブ

目を開いてまずユウキの視界に広がったのは、汚れ一つない白色。それがトイレの個室の扉であると気づくのに、そう時間は掛からなかった。

「チキン、だな・・・ホント」

ユウキは頭を抱えて便所の個室の床を見た。タイルとタイルの狭間の線が一部歪んで見える。それはほんのりと瞳に涙が溜まっている、何よりもの証拠であった。

「はぁ・・・」

ツバメが答えを口にする前に、ユウキはその場から逃げ出した。憑依対象であったナナの体だけを残して。

術者であったユウキの意識は自らの体へと戻った。

おそらくあのままナナの体は道に倒れ込み、どこかしらの怪我を負ってしまっただろう。本来ユウキの計画では、公園のベンチにツバメと座り、そこで憑依を解除するつもりだった。

それでも急にナナが眠ったかのようになれば不審ではあるものの、今回のような比ではないはずだ。

「どーしよ・・・」

ナナに対して今後どう弁解するか、考えていなかった。これから考えが浮かぶわけでもなかった。

しかし、今のユウキにとってそれは些細なことに成り下がってしまっている。不謹慎であることは重々承知だ。
ユウキの頭の回路を駆け巡るのは。

「はぁ・・・ツバメ・・・」

自分の意気地の無さにはホトホト呆れてしまう。こんなことまでしておいて、最後の最後で逃げるなんて。
なぜこうもあと一歩が踏み出せないのか。
たった一歩。
たかが一歩なのに。

「・・・・・・・」

されど一歩などと、ユウキは思う気にもなれなかった。

ーーーーそんなこと分かってんだよ。

今回の件で、ツバメとの間には一歩なんかじゃ追いつけないような『道』が、やはりあるようにユウキは思えた。だからこそ、たった一歩、あと一歩、たかだか一歩、と考えないと身が持たない。
『道』があっても、ユウキがその恋を諦めないのは、一握りの可能性があったからだ。しかしその可能性も、するりと指と指の間をすり抜けた気がした。

（なんで、なんで忘れてたんだろ、昔のこと・・・。あんな風に接してれば、チキンって思われるのは、当然だよな・・・）

ユウキは、ツバメが語ったエピソードにはなかったことまで、相乗効果的に思い出した。思い返せば、確かに自分はチキンだったと、

嫌でも認めざるをえない。
高校に上がってからは、憑依術のために本格的な精神訓練を積んできたから昔ほどチキンではないはずなのだ。しかし、それでもツバメに映っている自分はチキン。それを突きつけられたとき、ユウキは悟った。
己の可能性がゼロに等しいということに。

（忘れてなかったら、こんなことしなかったのに。なんで忘れてたんだろう。思い出してたら、こんな・・・こんな・・・）

ユウキの頭の中にはツバメの表情がグルグルと回っていた。ユウキにとってそのツバメの目つきには、ユウキに対して心から普通、もしくはそれ以下で、最低でも恋愛対象には入れない程の印象を持っていることが見て取れた。

（もしかしたら俺だって・・・なんて、馬鹿みたいだな）

ユウキは左手の甲をさすりながら個室を出た。俯き加減のままユウキは歩き出す。
家までの道のりは、行きの時よりもひどく遠く感じた。
今日も消防車のサイレンが、どこからともなく聞こえた。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

「はぁ・・・」

ユウキはやっとのことで家に着き、自室のベッドへ真っ先に向かった。

今日は疲れたんだ。
とりあえず晩飯までの小一時間でいいから仮眠をとりたい。

（ツバメ・・・）

帰りの道中、終始考えていたのはツバメのことばかり。
彼女のことを考えれば胸は締め付けられるように痛むけれど、今まではそれさえ心地よかった。
声が聞ければ嬉しいし、笑顔が見れたなら最高だ。
だが今は、痛みしかそこに残らない。
ユウキは目を、静かに閉じた。

ドンドン

ユウキは、はっとしてベッドから飛び起きた。この音は自室の窓が外部から叩かれたために発生したものだと、瞬時に理解する。
そしてこれはいつもの呼び出しの合図だということも。
ユウキはカーテンを横薙ぎに払って、金属の小さなレバーを引くことで窓の施錠を解除し、目の前のガラスを右へスライドさせた。

「よ、よぅツバメ」

「いるなら、早く開けなさいよ。こっちも寒いんだから」

いつの間にか空は漆黒に包まれ、光のビーズを散りばめていた。今夜の月は満月。春といっても、まだまだ寒さが残っていた。日中が暑かったからとも言えるが。
ユウキの目と鼻の先にいるのはツバメ。彼女の手には竹刀が握られていて、それでユウキの部屋の窓ガラスを叩いていた模様。
ユウキは、今ツバメの顔を見ることができて幸運なのか不幸なの

か、分からなかった。ただ、自分の気持ちがバレないようにすることに関しては天下一品のユウキは、いつも通り振る舞うことができる。

「で、何か用か？」

「アンザイから連絡網で、明日の部活は視聴覚室ね。レンジに回しといて」

「りょーかい」

ユウキとツバメは、簡単な連絡はこうして家と家の間を介して伝達し合っている。これは幼い頃からしていることであったが、最近めっきりその回数は減った。

ツバメはまだ何か用件があるらしく、少々キツい目つきでユウキを見ていた。

「今日は・・・その、どうしたの？」

「は？」

映画館の時はあれほど薄い反応をしていたのに、その質問をされるとは思っていなかった。

ユウキは少し救われたような気持ちになった。

「だから、今日は何で途中で帰ったかって言ってんの！！」

「あ、えと・・・体調、不良？」

「なんで疑問形なのよ」

とっさの出来事に対応できないユウキの小さな脳は、いつも使っているズル休みの常用文句を、自身の口から吐き出させていた。

「もう、何それ？」

「はは、わりぃ」

ツバメは肘を窓の縁に乗せ、手のひらでその小さな頭を支えた。いつもならユウキが見下ろす側だが、窓辺の会話の時に限り見上げる形になる。

「まったく。ってか聞いてよ、あの後ナナがさぁ」

「・・・あぁ」

ツバメの話を聞くところによると、どうやらナナは無傷らしい。急に道端で倒れたと思ったら、すぐに立ち上がり、ナナ本人も何が起こったか分からない様子であった、と。

おそらくナナはなぜ自分がここにいるのかという、根本的な部分から混乱していたに違いない。しかし事情を知らないツバメがそのことに気づくことはなかった。

「あたしなんでここに？　って言うの。笑っちゃうでしょ」

「ははっ、そうだな」

その後のナナに関しては、ツバメが今までのことを説明してくれて、幸運にも丸く収まったらしいが、何分大事な部分はあやふやなままのため、明日ユウキはナナに質問攻めに合うだろう。

（ま、今夜中に考えればいいか。言い訳は）

「でね、それでね・・・って、聞いてる？」

「ん？　あぁ、聞いてるよ」

いつも通りの会話。いつも通りの声。

今はそんな当然を思う度に、胸が矢で射抜かれたように痛む。できればここで声を張り上げ叫んで、その苦行を少しでも軽減したい。

そして、いつまでも喉につかえている、どうしようもない思いもろとも外に吐き出したかった。

しかしそれでも、それが出来ないのは、自分がチキンだからだと、ユウキは自分に弁解するしかなかった。他に理由があったとしても、結局はそこに帰着するだろうと思っていたから。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

ユウキは晩飯を済ませ、風呂に入り、自室に戻った。そして充電中の携帯を手に取り、レンジにメールを書いた。

「明日の部活は、視聴覚、っと」

送信ボタンを押し、送信完了を待った。しかし、電波が悪いのか、なかなか送信できない。ユウキは窓を開け、効果があるかは不明だが、携帯の電波が届きやすくしようとした。

ユウキは窓から乗り出し、携帯を高々と掲げる。

「あれ・・・ツバメ？」

目の前の山吹家の一室、つまりツバメの部屋のカーテンが若干隙間を開けていたため、ユウキはその中の様子を伺えた。しかし見てはいけない、という何か言いしれぬ力が働き、ユウキはそそくさと窓から首を引っ込めようとした。

（でも、ちょっとだけ・・・）

ユウキは悪魔の囁きに同意し、いたずら心でツバメの部屋の様子を覗いてしまった。

中にいるのはツバメ一人。なにやら机に向かっている。

（勉強してんのか・・・？）

ツバメは眉間にしわを寄せ、非常に悪い目つきをしている。

数秒後、ツバメは大きな溜息をついた。

（そんな難しい問題なのかな）

ツバメは頭が良い。全国模試でも五百位につけるほどで、補修常連のユウキとは相反して、教員陣からも期待されている。ユウキはツバメが学習における問題で悩んでいる姿を見たことがなかった。

（何か・・・様子が、変だな・・・）

ツバメの瞳の中には、光がない鬱蒼とした気配が漂っている。目の前の問題が目に入っていないようで、そもそも問題がそこにあるのかさえ疑わしい。というより、ツバメの手元にシャープペンシルが見当たらない。

ユウキが見つめていると、ツバメはおもむろに椅子から立ち上がり、カーテンを押し広げて窓を開けた。

（うそだろ・・・！！）

ユウキは息を殺して素早く自室に逃げ込み、窓とカーテンを閉め、こっそり自室のカーテンの隙間からツバメの様子を観察した。どうやら気づかれてはいないようだ。

ツバメは空を見上げ、いつもの強気な彼女からは想像できない憂鬱な顔で、また溜息をついた。その時、ユウキはツバメが悩みを抱えていることに気がつく。

（あいつも、悩むのか・・・）

初めてみるツバメの表情に、ユウキは少しの驚きを覚えた。そして、胸が痛んだ。

今彼女の前に出たら、俺は彼女を笑顔にできるだろうか。

彼女は、その悩みを俺に打ち明け、頼ってくれるだろうか。

ーーーーいや、それは無理。

だって俺は彼女にとって、チキン、だから。

「はぁ・・・」

ユウキもまた、大きな溜息をついた。その重い息はユウキの部屋のカーペットに染み込んだ。辛さを溜息に込めたところで、このもどかしさが消えることは無い。それでも溜息が出るのは、この辛さを乗り越えてみせる、と心のどこかで信じ、足掻いているからだ。

限りなくゼロに近い可能性でも、ゼロなんかじゃない。実質ゼロ

でも、ゼロなんかじゃないって、知らず知らずのうちに信じてる。

（そうだよ、な・・・。ツバメを諦めることなんて、初めから出来ないよな・・・）

自分の信じているゼロに近いその可能性は、絶望を示唆するためのパーセンテージなんかじゃない。そう気づくのに、少しだけ時間が必要だった。

信じようとする気持ちは、信じたい衝動だ。

だってやっぱり、ツバメの笑った顔を見たら嬉しかった。辛そうな顔を見たら悲しかった。

だから、自分の恋心を信じる理由はそれだけで、十分のはずだ。

6／15　ラッシュ妄動

「おいどーしたァ？　地球最後の日みたいな顔してェ」

「はは・・・」

水曜日。多くの学生は学校へ、ほとんどの大人は会社へと出向く。ユウキもその例外なわけがなく、いつものように登校し、男女それぞれ同じブレザーの制服を着た者達が行き交う中、げた箱を開けた時点でレンジに会った。

「明日また休日なんだからさァ、今日は休みにすればいいのにな。一日挟んで学校なんてダルすぎィ」

「・・・そーだな」

レンジは異常なまでにイケメンだ。虎のように鋭い瞳はパッチリ二重で、鼻は外人のように高く尖っている。体格は今時でいうところの細マッチョ。

「レンジ髪切った、よな？」

「ああ。どー？　似合ッてる？」

ユウキの方から向かって左側だけ長く、右側は耳の上辺りを刈り上げている。今時の、アンバランスなお洒落カットだ。

「ライン入れたかッたんだけどなァ。あと色も」

なぜこうも美形なのか。ユウキは、もし自分があんな美顔に恵まれていたら、と常に思う。きっと他の男子達も同じ気持ちであろう。決してユウキはブサイクではない。かといって人目を引くような容貌も持ち合わせていない。

「ん？　どーしたユウキ。ジロジロ見んなよォ」

レンジに対する憧れや羨み、尊敬の念は増す一方だった。ここ最近では憎しみに近い感情さえも芽生えてきた。

「そんな見るなッてのォ。お前は女子かよ」

「くっ！」

さりげないモテモテ発言に、憎たらしさを抑えきれなかったユウキは、とうとうそのイケメンに手を出した。顔の形が崩れますようにと願いを込めながら、レンジの両頬を引っ張る。

「にゃ、にゃにひゅんだよォ～」

「くっ！　くっ！！」

まだイケメンの面影が残っている。これはもっと手に力を入れた方が良さそうだ。

「にゃ、にゃめろ～！」

「ん？　ユウキ？　何してんの」

横から不思議そうに二人を見つめているのは、今さっき登校したであろうツバメ。
ユウキはおもわずレンジから手を離してしまった。

「よ、よぉツバメ」

「聞いてくれよツバメ！　ユウキッたらひどいんだぜ！？」

レンジはユウキの元から離れ、ツバメの小さく細い体に縋った。
しかしツバメはレンジの頭を手のひらで押し退け、迷惑そうに眉間のシワをよせる。

「うざい！　離れろ！」

「そ、そんなァ」

「・・・・・・」

「・・・ってか、なんか今日のユウキ様子変ね。いつものレンジとドングリの背比べなテンションはどこにいったのやら」

「そ、そうか？」

「確かに今日のユウキおかしいィ。もッとテンション上げてもらわないと俺つまんねーぞ」

ユウキはいつも通りに過ごしていたはずだった。しかし客観的に見たら通常の自分ではなかったらしい。
ユウキはうっすら笑みを浮かべてその場をはぐらかそうとする。

「あっ、ナナ！」

「やや、ツバメ！　おはよー！」

微妙な空気が立ちこめる中、タイミング良くナナが登校し、ナナはツバメに一切陰りのない笑顔を振りまいた。昨日の今日で倒れた人には決して見えない。厳密に言えば、倒した、ということになるだろうが。

「ナナ大丈夫なの？」

「ん？　ああ昨日のね。大丈夫だって！」

「昨日？」

レンジがボヤッとした半目で、ツバメとナナの会話に割り込んだ。その疑問は数秒間宙をまい、ツバメがそれをキャッチした。

「昨日ね・・・」

「ふんふん」

ツバメは包み隠さず昨日のことをレンジに話した。昨晩ユウキが聞いた『映画後のこと』はいくらか割愛はされているものの、主な流れからははずれていなかった。

そしてツバメの説明中、ナナがなんとも微妙な、固定されていない表情でユウキに話しかけた。

「昨日さ、何か作戦あったよね？　二人きりになるとか何とか」

「えっ、だから言ったじゃん。俺にガチで急用ができたって」

「あれ？　そうだっけ？」

「何だよボケてんのか？」

ナナは、倒れてからの記憶が曖昧になっているらしかった。つまりそれは、こちらからしたら改竄し放題ということだ。

また、ユウキが知ったのは今よりももっと後のことだが、実は昨日のうちにナナは医者に診てもらっていたらしい。診断結果は思ったよりも呆気なく、熱中症による立ちくらみだろうということだ。昨日は乾燥してて太陽光がいつもより厳しかったから、納得はいくと思う。

「確かに作戦実行できなかったのは悪かったよ。今度ジュースでも奢るからさ、それで勘弁！」

「え、あ、うん・・・」

ナナは自分の記憶に正確性も確実性もなく、それを調べる手段もなかったため、それをそれとして、渋々ながらも受け止めた。

（とりあえず、一件落着・・・）

「えー！！　いいないいなァ、お前等一緒に遊んだのかよ～。俺も誘ッてくれればいいのにィ！　つーかナナちゃんダイジョブ！？」

「あ、うん。平気平気」

レンジがユウキに向かって、口を尖らせてユウキに刺すがごとく接近してきた。レンジはユウキから向かって左の方の髪を若干食っていて、眉毛を「ル」の字にしている。

「また今度、遊ぼうな」

「絶対な！　絶対だかんな！　ッてか明日！　部活の後どッか行こ！」

「はいはい・・・」

レンジはまるで、子供がお母さんにお菓子をとっておいてもらうかのような顔で、ユウキに縋るが、ユウキはツバメがやったように手のひらでレンジの頬を押し退けた。

「そろそろホームルーム始まるから教室いこうよ」

ツバメがナナの制服の袖もとを摘み、引っ張りながら提案した。どうやら、げた箱前で長らく屯（たむろ）ってしまっていたようだ。

「何見てんのよ」

「え？　あ、いや今日もチビだなぁと思って」

「だからチビ言うんじゃねぇ！」

ツバメはユウキの足に向かって急転直下で自らの足をギロチンよろしく振り落とした。

また、ナナとレンジが影でニヤニヤと、頬を丸形に赤く染めてにやついていたことをユウキは知っている。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

「よし、全員集まったな」

ユウキ、ツバメ、レンジの三人、つまり陸上部の全部員は放課後のこの時間、視聴覚室にいた。

部屋の中央には、長机を四つ連結させて作られた「口」の字があった。

ホワイトボードを背にして座っているのがこの陸上部の顧問、アンザイ。

「ったく、ミーティングとかメンドー」

レンジが体を沿って、パイプ椅子にもたれ掛かりながらそう言った。切ったばかりの髪をクシャクシャといじっている。

「俺だって今日は早く帰りたいんだ。でないと『萌え萌え☆マジカルゲッチュー』が始まってしまう」

アンザイはサングラスを掛け直した。基本的にアンザイは端が尖ったスポーツサングラスを常に装着し、素顔を見た者は実はいないんじゃないかとまで言われている。

前髪にはストレートパーマをかけ、前髪以外の部分は逆立てている。ゴツゴツとしているが、モデル体型でもある。

端から見ればモテそうだが、アンザイの趣味は深夜アニメ。それも『萌え』系の。

最近ＢＳを使い始めたらしく、見逃した、もしくは見たことのな

い萌えアニメを日夜探索しているそうだ。

「アンザイ、マジその趣味止めた方がいいぜェ？　クラスの女子、あの趣味さえ無ければッて、いつも言ッてッし」

「バカかお前。『萌え』は俺の人生において必要不可欠要素だ。一日に2時間は供給しないと死んでしまう」

「死ぬのか・・・」

アンザイは大切なものを傷つけられたような気になり、かなり真面目な顔で言った。そして自分の指と指を交互に絡ませ、前のめりになってそれを口の辺りにもってくる。

「そもそも、ズレているのは俺ではない。お前等含め世間がズレてるんだ。自立心だの個性だのと叫ばれている昨今、なぜ好きなものを好きといって糾弾される。なぜ軽蔑と侮蔑の意を持って接され、オタクなどという固有名詞で一括りにされる」

「地雷踏んだなレンジ」

やってしまった、と今にも言いそうな顔のレンジを横目に、ユウキはレンジに呟いた。アンザイは構わず評論にも似た言葉を紡いでいく。

「これは明らかな矛盾だろう。確かに『萌え』に嫌悪を持つのも自由だろうが、それにしたって『萌えが好きな者』までその嫌悪の範囲を広げる必要はないはずだ。なぜ自己の経験や理解範囲だけをもってして、他者を縮小して判断する。これはむしろオタク文化に限ったことじゃない。イエスノーに二分される事象はほとんどといっ

て言い程、あてはまる。まぁつまり・・・」

「長い。早く用件言いなさいよ」

ツバメがアンザイの言葉をバッサリと断ち切った。その太刀筋は真(まこと)しなやかで、アンザイは口を少し開けて固まってしまった。

「教師に向かってなんだその口の聞き方は」

「うるさい。なんであんたは毎回この手の話になるとそうなるなの」

「お前今教師にあんたって言った？」

そしてアンザイが、まぁツバメだから許すが、と続けたことをユウキとレンジは聞き逃さなかった。

要するにアンザイの好みはロリ。それを承知の上でレンジはアンザイに向けて軽蔑の視線を送った。ユウキはユウキで、俺もロリコンなのだろうか、と一瞬不安になったため、レンジと同じような行動にはでれなかった。

「さて本題だが、今回集まってもらったのは他でもない。一つ、お前等に頼みごとがある」

「頼みごと？」

三人はキョトンとした顔で、アンザイを見た。アンザイのサングラスが蛍光灯の光で黒光りし、三人の姿を反射。サングラスの表面はまるで黒い鏡であった。

アンザイはサングラスの真ん中にあるレンズのつなぎ目を軽くつつき、サングラスを掛け直した。

「ああ。受付のアルバイトなんだが・・・」

「受付？　バイト？」

レンジが、ユウキとツバメの心情を代弁するかのように、アンザイに疑問を投げかけた。

基本的にこの学校ではバイト禁止だが、校長の許可をもらえばバイトをすることが出来る。

「明日行われる、とある声優さんの握手会の受付だ。実をいうと、俺はその声優さん、つまりカナさんの大ファンなんだ」

「・・・だから？」

どうでもよい情報をきっかけにユウキがしびれを切らし、少し睨むようにアンザイを見て発言した。

「カナさんの握手会が明日、桜町にあるサクランビルで行われるという情報を俺は入手した。するとだ、生徒会にその受付役の依頼が来ているとういうではないか」

「・・・つまりィ？」

アンザイ、声優、ファン等々のキーワード達から、大体は察しはついていた。それでも一応会話として成立させるため、レンジは言葉を続けた。

「俺はどうしてもその握手会に行きたくてな。生徒会からその仕事を無理矢理奪ってきた」

「そこまですんなよ！」

「呆れた・・・」

レンジがツッコミを釘の如く打ち込み、ツバメがそれに呆れという名の蓋をした。

その後も話を聞くと、どうやらカナさんの握手会は百人限定らしく、アンザイもその握手会に応募したが見事にはずれてしまったらしい。

また、そのバイトは４人までだそうで、陸上部員と顧問のアンザイでちょうどその人数を満たす。

「俺はカナさんに会える。お前等はバイト代が貰える。双方、利益はあるだろう？」

「まぁ・・・確かに」

「うちは嫌。なんでそんなのに出なくちゃいけないのよ」

ユウキが賛成しかけた直後、ツバメが自己主張の乏しい胸の前で腕を組み、口を窄(すぼ)めて言った。

「これは部活動の一環、つまり強制参加だ。例外は許さない」

アンザイはカナさんとやらに、部員が来なくて統率力のない顧問だと思われたくないのか、アンザイは常に例外的であったツバメも今回に限り特別扱いしなかった。

「何よそれ」

「まぁもうすでに名簿に登録してしまったんだがな」

「卑怯だァ！」

レンジは少し残念そうな、かつ疲れたような顔で叫んだ。
ツバメは、はぁと溜息を短くつき、パイプ椅子の背もたれに寄りかかった。
ユウキは生まれて初めてのアルバイトに好奇心や興味にも似た冒険心を燃やす。
アンザイは、ふっ、ははっ、と不気味にほくそ笑み始めた。

「明日はユウキ達と遊びに行こうと思ッてたのにィ」

「メンドくさ・・・」

「バイト・・・かぁ」

「ふふっ。くくくっ。ふっ。ははは っ」

7／15　鶏鳴スニーク（前書き）

もうすぐ春休みです。私は受験生なので、勉強をせにゃなりません。ですので、なるべく早くこの小説を書き上げてしまいたいわけです。そういうことで、3月中には完結させるつもりです。つまり、一日一話くらいのペースですね。

ハードだろっ！！

7／15　鶏鳴スニーク

「いいか？　『マジカルゲッチュー』の『まじかる』は古文における打ち消し推量などを表す助動詞『まじく』の連体形にもかかっている」

「世界一どーでもいいわ」

本日はみどりの日。天気も良好。

日本中の人々が休日である今日を満喫するが、中にはそう楽もしていられない者達もいる。不幸にも無理矢理バイトをやらされている、とある高校生三人がちょうどそれに該当する。

ユウキ、ツバメ、レンジは、アンザイに約三十分間、『マジカルゲッチュー』の詳細を、耳にタコができる程聞かされていた。しかしその情報は右耳から入って左耳から抜けるように、頭の片隅にすら残らなかった。

「にしても高けェな」

「四十階建て、高さで言えば百五十メートルくらいあるからな。そして俺らが乗っているこのエレベーターは、最近商用化された最新鋭の高速エコエレベーターだ。難点は従来よりも壊れやすいことだが、基本的に壊れるなんてことはないだろう」

「アンザイ、よく知ってわね」

「ふっ。握手会会場の事前調査など、基本中の基本だ。蛇足だが、このエレベーターは無駄を省くために一階と三十三階しか止まらな

い」

「なんで三十三階なんだ？」

ユウキがエレベーターの壁にもたれ掛かりながら尋ねた。アンザイは待ってました、と言わんばかりに答えた。どうやら自分の持っている情報をなるべく多く垂れ流したいらしい。

「このエコエレベーターを運ぶためのコードが四十階まで足りないらしい」

「じゃぁあと七階どうするんだよ？」

「そこで一旦、他のエレベーターに乗り換えだ」

「うへぇ」

ユウキはエレベーターから見える、ガラス越しの風景を眺めた。エレベーターが四人を上へと運ぶにつれて、風景の中の物体は徐々に小さくなっていく。

四人はエレベーターを、一度乗り換えるため、屋上から七階下の階で下りた。

「何か人っ気なくね？」

ユウキ達が下りると、その目に飛び込んでくるのは豪華絢爛なここはパーティー会場ですか？　とその辺のタキシードに聞きたくなるようなフロア。などではなく、パッと見ただ広い円形の空間。

そこに人は一人もおらず、あるのはユウキ達の近くの側面に設置された十七個のエレベーターと、外が見えるような多数の窓のみ。

ただ、エレベーターの幾つかには『故障中』と書かれた紙が扉にセロテープで貼り付けられていた。

「人気もなにも、今日は休日だから、このビルに社員は一人もいない。そもそも、ビルの上の方は仕事場としては使っていないらしい」

「じゃぁ何に使ってんだよ？」

「こういうイベントとかのためじゃないのか？」

たわいのない話をしながら、四人は『屋上行き』と横にプレートが立っているエレベーターに乗った。

そして、再び眼下に広がる町の風光を見ながら屋上へ向かう。

「いやいやしかし、早く会いたいものだな。カナさんに」

「それ言ッたの何回目だよ？」

レンジは、アンザイが濫用している台詞をくい止めるように言った。

「ってかアンザイ。そのマジカルなんとかと、カナさんって何か直接関係あったりすんのか？」

ユウキが、いつも通り白衣のポケットに手を突っ込んでいるアンザイに尋ねた。アンザイは、さっきまで何を聞いていたんだ、と言って勉強のできない子を見る親のような目をして。

「大ありだ。『マジカルゲッチュー』の主人公・清涼院アスカの友人であり、魔法使いとしてのライバルであり、同居人であり、密か

にアスカが思いを寄せている、山田中島ケンシロウの第二人格の山田中島ヶ原ケンシロジロウ役を、カナさんは務めている」

「え？　あ、はぁ！？　な、何て！？」

「ちなみに山田中島ヶ原ケンシロジロウの塩基配列から山田中島ケンシロウの第二人格としての人格プログラムを作った人物・山田中島ヶ原之上ケンタウロスノジロウの上司である山田中島ヶ原之上ヶ崎フリューゲル・マルクス・アパルハントスヴァルキリア（通称・アパさん）役の田中島さんの弟の妻の妹はの下の名前は、主人公・清涼院と同じ、アスカだそうだ」

「・・・は！？　はぁ！？　はぁっ！？」

アンザイはどこで息継ぎしたのか分からないほど素早く、そして得意げに説明した。完全に混乱したユウキは、途中からアンザイに文句を言うように疑問符を投げかける。

そしてそうこうしている内に、エレベーターは屋上に着いていた。

「あっ、こんにちわー」

エレベーターの扉が開き、４人の目の前にいたのは、カナさんであった。どうやらちょうどこのエレベーターの前を通りかかったようで、アンザイにとってそれは、カラオケでまさかのご本人登場ばりに驚愕で、幸運な偶然であった。

カナさんは、女優業でもやっていけると思わせる程の美貌。彼女の肌はまるでとれたての桃のように、シワ一つなく張っていて、薄いピンク色だった。

ツバメよりも少し高いくらいの身長で、Ｔシャツにジーパンという、何ともシュールな姿だった。

そしてカナさんの斜め後ろにはマネージャーと思われる、黒のスーツに身を包んだ凛々しい中年男性がいた。髪型はオールバックで決めている。

「こここに、こにん、こ、こんちに、ここ、こんにち、わ！」

『マジカルゲッチュー』のややこしい人名をあれほどスラスラ言えていたアンザイが、突然の幸福からか簡単な五文字を言うのに１０秒はかかっていた。

「ふふっ。こんにちわ」

カナさんは、顔面に埋め込まれた二つの黒真珠を薄く延ばし、風で靡(なび)く長い黒髪を押さえながら笑った。

彼女の声は妙に甲高く、もっとも声優らしいとユウキ達に思わせた。

「えっと、高校生のアルバイトの方々、ですか？」

「はい！　そうです！」

「アンタは高校生じゃない」

カナさんは、四人の胸元にある関係者用のプレートと、制服の彼らを見てそう言った。

そしてカナさんは小さく微笑み、アンザイに対しておもしろいお方、と呟いた。

「では、また」

「はい！」

カナさんとそのマネージャーは、四人の前を通り過ぎた。それとほぼ同時に四人はエレベーターから出て、屋上の開けた空間へと足を置く。

「アンザイ、キャラ変わりすぎだろ」

「ふん」

「もう戻りやがった！」

アンザイは何もなかったかのように、いつものクールな化学教師に戻った。

彼のサングラスが、雲一つない空から注ぐ太陽光を反射する。会場とされるこのフロアはサッカーコート一面分くらいの広さで、万が一落下事故が起きないよう、高い柵が屋上の周りを囲んでいた。その柵は、屋上に吹き荒れる風を防ぐ役目も果たしている。

ユウキとツバメとレンジは辺りを見渡し、あれはステージか？マイクあるしな。ここは握手会じゃないの？　と三人の間で様々な言葉が飛び交うが、アンザイは無言でカナさんの背中を目で追っていた。

すると、アンザイの耳にカナさんとそのマネージャーの声が入ってきた。

「あれ？　リップクリームが無い」

「楽屋に忘れてきたんじゃないか？」

「ああ、きっとそうだわ」

まだ四人の近くにいたカナさんが、困ったような顔で手提げカバンの中を覗いていた。

「お忘れ物でしょうか？」

「え、えと、あなたは、さっきの」

ユウキ達のそばにいたアンザイは、三人の前から忽然と姿を消し、カナさんに話しかけていた。

アンザイの目元が漫画のようにキラリと光る。

アンザイは、カナさんを目で追っていたから分かる。彼女は今困っていると。彼女は楽屋にマニキュアを忘れて取りに行かねばならないのだと。高々マニキュア一つのために、一階にある楽屋へ戻らなければならないのだと。

「さきほどもお会いしましたが、私は顧問のアンザイと申します。わたしがカナさんにその忘れ物、つまりはマニキュアをお届けしましょう」

「え、いや、でも」

「それくらいは私が行きます」

カナさんのマネージャーがアンザイとカナさんの間に割り込み、アンザイの提案を拒否した。

「まーまー、そちらは何かと忙しいでしょう？　この程度の仕事くらいは暇な私めにお任せくださいませ」

マネージャーはアンザイを注意深く睨み、お引き取りください、と目で訴えかけた。しかしそれにめげず、アンザイはさらに詰め寄ってきて、しまいには懇願し始めた。

「頼みます。その仕事、私にやらせてください」

「なんでそこまでするんですか」

「カナさんの役に立ちたいからですよ！」

アンザイはストレートに、且つ大胆に叫ぶ。

マネージャーはその心意気に負け、アンザイにマニキュアを取りに行かせることにした。

出会い頭にマネージャーは、アンザイがこの高校生達の顧問の教員だということ、そしてこの握手会の関係者だということも、加えて理解していた。だからマネージャーは、一人前の社会人が妙な真似をすることはないだろうと思慮し、アンザイに余分な仕事をまかせたのだ。

「・・・わかりました。じゃぁお願いします。でも、変なことはしないで下さい。これ、楽屋の鍵です」

「了解しました」

アンザイは敬礼のポーズを取った。そしてマネージャーから鍵を受け取り、エレベーターの隣にある階段の方へ向かった。

「そこまですんなよ・・・」

「ッてかアンザイ、なんで階段？」

サクランビルは四十階建て。屋上であるここから一階まで行くのに、どう考えてもエレベーターの方が早いし、何より疲れない。
アンザイの無謀な奇行を、カナさん達含め五人が疑問に思い、レンジがそれを声にして尋ねた。

「愚か者。俺をナメるなよ」

レンジは愚か者に決定。アンザイはニヤリと笑い、レンジを見下した。

「俺は、階段の手すり滑りの日本記録を持っているんだ。俺の手すり滑りに勝てる奴はいない。例え、相手が最新式のエレベーターでもな」

「手すり滑りってお前・・・」

「バッカじゃない」

「勝てる訳ねーだろ」

ギャグなのか、ガチなのか。ツバメが呆れ返っているのをアンザイは無視し、レンジに指を指しながら豪語した。
そして、階段へと続く鉄の扉を開き、手すりに飛び乗り、その体を一気に滑らせる。

「以外に早い・・・！！」

その速度は決してそこらの中学生や高校生では出せないだろう。
アンザイは風を切り、一つの手すりを滑り終わり一旦着地。滑って

いた時のスピードそのままに、右手を軸にして方向転換した。そして、次の手すりに飛び乗り、猛スピードで滑り降りる。

「もうほっとこうぜアイツ・・・」

「そーだな」

五人は、どうせ彼はすぐにエレベーターを使うだろうと思う。
声にも出さず、目も合わせていない。しかし、五人の思考はピタリと一致していたのだった。

7／15　鶏鳴スニーク（後書き）

これからは、小説の質が落ちないようにガンガン更新していくつもりです。

8／15　嵐の前のサイレンス

屋上のフロアは少しずつイベント会場らしくなってきていた。
大量に積まれた段ボールの中には、アニメキャラクターがジャケットの妙にぶ厚いＣＤが詰まっている。握手会に来る人は限定百人なので一人あたり四枚以上はＣＤを買わないと、段ボールの中のそれは無くならないと思われる。
また、ポスターの類が落下事故防止用の柵に張り付けられていて、カメラを持った報道陣もチラホラと現れた。
ユウキとレンジとツバメは、会場準備及び清掃の邪魔にならないように、自分達の仕事の時間までフロアの端の方でたむろっていた。

「いやさァ、カナさん声優なのにかわいくね？」

「まぁ確かに」

レンジは、声優に対して所詮声だけだと偏見を持っていた。しかし今回の出会いでその誤った考えにメスが入った。ユウキも、レンジほど偏った思考回路はしていなかったが、一応の合意はしておく。

「へぇ・・・」

「ん？　どーしたツバメ」

「ユウキは、そういうのが好みなんだ。へぇ・・・」

ツバメはユウキに聞こえるよう、わざとらしく大きい声でそう言った。ユウキはツバメに見上げられているはずなのに、なぜか見下ろされている気がした。

「いや、別に、そーいうわけでは・・・」

「別にいーのよ」

「あ、あの」

「ユウキの好みとか興味ないし。アンタがあの女の尻を追いかけようが、鼻の下伸ばそうが、うちにとってはど～でもいいことだから」

「いやだから」

「好きにすればいいじゃない。何ならこっそり列に並んで握手してもらえば？　きっとあのオタクＣＤも買えば喜ぶわよ」

大きく食い違った言葉の歯車。

ユウキは決して心からカナさんをかわいいとは思っていない。そういう思いを込めたアンニュイな表情を、レンジとの会話の中でしていたつもりだったが、ツバメには伝わらなかったようだった。

「・・・・・・」

レンジにとってこの微妙な空気は非常に虫の居所が悪かった。あ～え～う～と唸りつつ、レンジは今の雰囲気の打開策は誤魔化ししかない、と思った。

「でもほらァ、あァいうタイプは裏がありそうだよな！」

「あ、ああ！　俺も思った！　あれは裏あるよな！　楽屋とかでタバコぉとか言ってな！」

ユウキはレンジの言葉を、まるで待ちこがれていたもののように受け、ツバメの誤解を解こうと必死にレンジの調子に合わせた。少し言い過ぎた感じもあり、カナさんに聞こえていないか不安になったが、とりあえずこれぐらい言っておけば、絡まったツバメとの糸は解けるというものだ。

「ふ～ん」

ツバメは口を尖らせてユウキ達を見た。その瞳にはまだ疑念を含んでいる。

そしてツバメは徐(おもむろ)に歩きだし、ユウキ達の元を離れた。

「？　どこ行くんだ？」

「トイレ」

ツバメはユウキの問いかけに軽く答え、人ごみに紛れながら階段を下りていった。

レンジはツバメの姿が見えなくなるのを確認すると、ユウキの目を見て言った。

「いやァびっくりしたわァ」

「俺もだよ。まさか誤解されるとは・・・」

「いやそっちじゃなくて、ツバメの方がさ」

「？　何のことだ？」

レンジは目を閉じ、前歯で薄い下唇を噛んだ。そしてレンジはユウキの両肩に両手を乗せ、カッと開眼する。

「いやいや察せよッ！！」

「はぁ！？　だから何を？」

レンジはユウキの中にある気持ちを知っている。

だからこそ、今気づいたツバメの気持ちを、そのまま今のユウキに伝えることはどこか癪なように思えた。

恋というものは部外者が無断で入り込んでいいような、簡単で、自由で、つまらないものではない。しかし、かといって見守るだけというのも後ろ髪を引かれる思いがある。

レンジは、ユウキにそれとなく、助言のように、諭すように、そして背中を押すようにツバメの気持ちの片鱗を伝えようと思った。

「いいか？　ユウキ。さっきのツバメはな・・・」

ユウキはいきなりのレンジの真顔にギクリとした。そして口に溜まった涎を一気の飲み込む。

「おい、こんなとこにいたのか。ん？　何してんだお前ら」

突然の声にレンジは話すのを止め、後ろを振り向く。ユウキは頭を横にずらして、レンジの頭でブラインドになっていた光景を見た。

「ア、アンザイ・・・。あッ！　いや勘違いするなよ！」

レンジが半笑い気味に言った。

勘違いしても仕方がない状況だった。片方が片方の両肩を抱き、

それはまさに男が男に告白するようなシチュエーション。確かに告白といえばそうだが、勘違いが起こるような艶めかしいものではない。

「なんだ、ユウキが受けか。普通ここはレンジが受けになる方が面白いんじゃないか？」

「だから勘違いすんなッてェ！！」

レンジは膝から落ち、両手を地面につけて叫んだ。

「つーか妙に早いなァ！　帰ってくんのォ！」

「だから言ったろ？　俺は日本一の手すりスベラーだって」

「手すりスベラーッて何だよォ！」

ユウキはレンジとアンザイの掛け合いを見つめていたが、内心ではレンジが言いかけたことばかりを考えていた。

（ツバメが・・・？　何だ・・・。ま、まさか・・・！　いや、さすがに・・・な）

嫌が応でも期待を感じてしまうのは男としての性分か。はたまた宿命や運命の類か。

ただ、ユウキは一昨日の出来事から、そういうことに関しては一種のトラウマを感じてしまっていた。

（・・・期待しない方が無難、だよな）

「・・・ぃ・・・ぉい・・・おい！　おい！　ユウキ！」

「おわっ！　な、何！？」

「何じゃねぇ。これ、着ろ」

アンザイは俯いていたユウキを呼び、意識を現実世界に呼び戻した。そしてアンザイがユウキに突きつけたのは、藍色の、本屋の店員などがよく着用しているようなエプロン。

「アルバイトはこれをつけるらしい」

「へぇ・・・」

ユウキとレンジはアンザイからエプロンを受け取り、それを着た。アンザイもエプロンを着用すると、キョロキョロと辺りを見回し始める。

「ツバメはどうした？」

「あァ何かトイレらしい」

「ん？　ところで何だよアンザイ。その小せェエプロンは」

「ああ。実はツバメのエプロンだけ一回り小さいものにしてもらったんだ」

「余計なお世話よ！！」

レンジとアンザイの会話の途中、どこからともなくツバメが現れ、

アンザイの言葉を引き金にツバメはツバメ特性・足指迎撃ミサイルをアンザイに向けて放ち、それは見事にジャストミート。アンザイは左足の指、厳密に言うと革靴を押さえながらその場に伏した。

「ぐわあぁ・・・」

「ふんっ！」

ツバメはアンザイの手元からはぎ取るようにエプロンを奪い、それを着た。しかし、それはブカブカのダルンダルン。小さいサイズのはずなのにそれでもか、と思い、ユウキとレンジは声を殺して笑った。

自分の姿を見て小刻みに震えるツバメ。顔はまるで般若。今にもブチ切れそうだった。

「はぁ・・・はぁ・・・。あぁ～痛かった」

「ふんぬっ！！」

「ぐわぁっ！　なぜ！？」

指の痛みから復帰したアンザイに向けてまたしてもミサイル発射。次の標準は右足の指だった。

ユウキとレンジは、それを見て凍り付き、笑えなくなってしまっていた。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

「よし。もうすぐ客が来るな」

アンザイは手元の腕時計を確認。四人はエレベーターの前に長机とパイプ椅子を置き、机の上には『受付』と書かれたプレートを立てた。

受付といっても彼らは、来た人が本当に抽選で選ばれた人なのか確認するだけ。

二人ずつでエレベーターの出口の両側に分かれ、当選者を待った。

「おっ、早速来たな」

頭にバンダナ、Tシャツのど真ん中にはアニメキャラクター、そして背中に大きなリュックサック。小太りの男が二名、エレベーターの中から現れた。

その男は右の方へ一瞥を加え、高校生くらいの男子二名を確認。対して左の方にはサングラスの大男と、少女。

「こんにちわー」

小太りの二人は迷わずツバメのいる方へ向かう。レンジは敗北感に見舞われたが、決して悔しくはなかった。

ツバメとアンザイは丁重に挨拶して、その小太り二人のチケットを確認し、入場を許可した。

「・・・何だよあれェ」

「しゃーねーだろ」

「・・・ユウキ、顔すごいことになッてんぞ」

ユウキは言葉とは裏腹に、切歯扼腕して悔しがっていた。馴れ馴れしく近づきやがって、とユウキは腹話術でも使っているかのように呟き、右斜め前方を進む大きな二つのリュックサックを睨みつけた。

「ほら、他の客来たぞ」

レンジがユウキの頭を鷲掴みし、グルリと目線の方向転換を促す。しかし、次々に現れるオタク達は一人たりともユウキとレンジの元へ来なかった。

「何なのよコイツら・・・！　ってかアンザイ！　少しは仕事しなさいよ！」

「だって俺の方に来ないんだもん」

多くのグッズを納めるための巨大なバックを抱えた男達はツバメの元ばかりに集まっていた。アンザイに受け付けてもらおうと思う者はいなかったのだ。

「ちょっと！　アンタ達も！」

「うっせ！　こっちの方に来さえしないんだよ！」

ツバメ達のいる方で溢れ返る男達の間から、ツバメはユウキとレンジに向かって叫んだ。それに対してユウキが反論。

「ヒュー、ツバメモテるゥ。なァ？　ユウキ」

「けっ！」

所々から、かわいいなぁ、だとか、こっち向いて〜、だとか。中には写真まで撮ろうとしている者までいる。ユウキは精神修行をしているのにも関わらず、感情を上手く抑えきれず、その顔はまるで鬼の形相だった。

「あッ、そうだユウキ」

「あ？」

「さっきの話なんだが・・・」

仕事がこちら側には来ないと判断。レンジは、先ほどアンザイの登場で遮られた話題を取り上げ、畏まって口を開いた。

ユウキの目つきは険しいまま、レンジに向けられた。感情が顔に張り付いてしまっているようだ。

「いいか？　ツバメはな・・・」

その時だった。

ユウキとレンジの前を一人の痩せた男が通り過ぎた。エレベーターを出て一直線に、奥で開会式を待つカナさんの元へ歩み寄っていた。

「ちょ、あの人受け付けしてなくないか？」

「あのォ！！　受け付けをしてから進んで下さ・・・い？」

レンジが細身の男に近づいた。そして呼び止め、受け付けをさせて。そうやって終わるはずだった。それが当たり前だった。

しかしそうはならなかった。
男は大きなドラムバックに手を入れ、無言のままに何かを取り出した。
「・・・は？」
それは紛れもない、銃だった。

8／15　嵐の前のサイレンス（後書き）

ここから一気にシリアス展開です。

9／15　悲憤インディグネイション

「・・・は？」

「おとなしくしてろ」

男の手に握られた銃はレンジに向けられ、今にもトリガーが引かれそうだった。

「そ、それ、プラモデル・・・だろ？」

カチ

カシャン

ズガァンッ！！

細身の男は高々と銃を掲げ、空に向かって弾丸を発射させた。その轟音はレンジの鼓膜を強く揺さぶり、目眩を起こさせるほどだった。

「マ、マジもん・・・！？」

レンジの頭の中は当然のごとく混乱。恐怖を感じる。

立ちこめる灰色の煙、雷のような爆音、黒々と輝く銃のフォルムは、リアル過ぎて逆に偽物のように見えた。

「な、何だ！」

「おい！　あれは！？」

「じゅ、銃だぁ！！」

周りにいたオタク達や会場の関係者はもちろんのこと、ユウキ達やカナさんも今の状況を理解した。当然、エレベーターに最も近かったオタク達は絶叫し、惑い、逃亡しようとした。しかし。

ズガァンッ！！

二発目の弾丸が空に飛び、沈黙が流れる。

「お前等にはもう少しここにいてもらう。エレベーターの主電源は落としておいた。あと十分もすれば予備電源が作動するから安心しろ」

そこにいた一同は男の言動に違和感を感じ、その意図を理解し倦ねた。

男は釘付けにした二百個以上の目を、一往に見渡す。その顔は冷静、冷淡かつ冷酷な顔をしていた。

「・・・ふん」

何事もなかったように細身の男は歩きだした。手に銃を握りしめて。

「おい」

そしてカナさんが座っている、エレベーターから最も遠くに位置

する長いすのところで、細身の男は止まった。カナさんを取り巻く人間は硬直し、ただ眺めるしかできなかった。

「俺はキリヤ。覚えてるだろ？　俺の名前くらい」

銃をゆっくりと上げ、左腕を地面と平行、つまり体と垂直の状態で止める。

「・・・いや、忘れたとは言わせねぇぞ・・・クロカワぁ！！」

向けられた銃口の先。それは、カナさんのマネージャーであった。カナさんや会場関係者は釜中之魚にも似て気絶寸前。にも関わらずマネージャーは妙に落ち着いている。

「知らないな。聞いたことのない名だ」

「てめぇっ！！」

銃の発砲をキッカケに静まり返ったその会場で、キリヤの怒鳴り声は会場の端から端まで響いた。

「それに、私の名はハセガワだ。クロカワなんかじゃない」

「いいや！　お前は確かに、クロカワ　リツヤ！　サクラングループの総取締役・・・！」

「え・・・！？」

カナさんはマネージャーを見上げた。

サクラングループと言えば、日本を代表する大企業の一つだ。今

いるこのビルも、その系列にある。
ただ、ここ最近不穏な噂が絶えないが。

「どういうこと・・・ですか？」

「・・・・・・」

マネージャーは声の震えたカナさんを無視し、キリヤを見つめた。その瞳に光はなく、生き物の目なのか疑ってしまうほど虚ろな目つきだった。

「カナさん、だっけか。アンタが知ってるハセガワっつーのは偽名だ。コイツはアンタが知ってるような人間じゃねぇ。もっと・・・もっと「黒い」奴だ」

キリヤは忠告するように言った。そして、人呼吸置いて、再びマネージャーを睨みつける。

「クロカワ。お前のせいで俺の人生は滅茶苦茶なんだよ」

「何の話だ？」

「とぼけんなっ！！　もう証拠はそろってんだよ！！」

キリヤは肩に提げたドラムバックから書類の束と数枚の写真、数個の録音機を取り出し、その場に散らかした。その直後に、マネージャーの顔から冷静さが消える。

「俺がこの五年間に死に物狂いで集めた資料だ。違法収益の行方、多重工作、架空名義、マネー洗浄に使用した銀行の口座。さらには、

偽手形の発行、違法な賄賂、脅迫電話。全て、調査済みだ。これらの資料が出回れば、お前等が詐欺を働いていたことが世に知れ渡るんだよ！！」

「詐欺・・・！？　どういうことですかハセガワ！！」

「・・・・・・」

「あとは、アンタの自白だけだ。さぁ、認めてもらうぜ？　アンタは犯罪者だっ・・・て・・・」

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

「レンジ！」

「ツバメ・・・」

ツバメはオタク達を軽く押し退け、ギャラリーの中でも最前にいたレンジの元へと走った。レンジは放心状態から解放されたのか、しっかりとした意識で今ある光景を凝視していた。

「レンジ、大丈夫！？」

「あァ、俺はダイジョブ。それよか、あっちでビビってるユウキのところへ行ってくれ」

「え？　あ、うん・・・」

レンジが指を指した方向には、オブジェのように硬直しているユウキがいた。ツバメは少しためらいながらもユウキの元へ行くと、近づくにつれて、ユウキの震えに気づく。
ユウキの状態は当然といえば当然だが、女である自分よりビビってしまっているユウキを見て呆れた。けれど、その時にこみ上げる感情は、失望などではなく。

（うちは、どうしてあんな奴のことを・・・）

ツバメは、イスにくっついているかのように固まり、魂が入っているのかさえ疑わしい程放心状態のユウキに手を差し出した。

「・・・・・・」

「ユウキ！」

「っ！！　ツ、ツバメ！？」

「こんなとこで縮んでんじゃないわよ。このチキン」

ユウキの心に、これほどチキンという言葉が刺さったことはない。
ユウキは、自分で自分が恥ずかしくなった。差し伸べられた小さい手が、そしてそれを掴まなければならない申し訳なさが、より一層、ユウキの胸を締め付けた。
ユウキがツバメの手をとろうとした、その時だった。

ズガァンッ！！

鼓膜を破る勢いで飛び込んできたその音は、更なる発砲を知らせるものであった。

ほどなくして、叫び声が上がる。

「きゃああぁぁっ！！！」

「何・・・今の叫び声・・・？　カナ、さん・・・？」

二人が聞いた悲鳴は、間違いなく、声に特徴のあるカナさんが音源だった。

ユウキとツバメは奥の状況を、垣間見た。

「え・・・？」

そこにあったのは、腹から血を流して、仰向けに倒れている細身の男の姿。そして更にその奥には、先から煙の立ちこめる銃を持った男がいた。

「マネージャー・・・さん？」

「確かに、俺はクロカワだ。クロカワ　リツヤ。サクラングループ代表取締役」

クロカワの小さな声も、この呆然とした沈黙が流れる場では、例え数
十秒前に大きな音があったとしてもよく聞こえた。

「ふん、気にするな。致命傷は避けてある。お前には少し、聞いておきたいことがあるんでな」

「ぐがぁっ・・・！！　くそっ！！　クロカワぁ！！」

キリヤは撃たれた部位を手で押さえながら、上半身だけを起こした。そのまわりにある書類の束やテープは、男の血で染められ、その色は黒に近い赤。
クロカワの側にいた者達は震え上がった。至近距離からの銃声で、気を失いかけている者もいる。

「どこで情報を得た？」

「はぁ・・・はぁ・・・」

「早く答えろ」

クロカワは銃口を向け、キリヤの回答を急かせた。

「・・・スパイ、だよ。アンタんとこの支社に、送り込んでおいた。どこの支社が詐欺活動をしていたかは、分かってたからなぁ」

キリヤはサクラングループに、仲間を送り込んでいた。それは自分と同じ、詐欺の被害に合って自分の会社を倒産させられてしまった者だ。
その仲間が、破棄されるはずの書類を自宅に隠すなどして、可能な限り詐欺の立証に必要な分の証拠をかき集めていた。
そして確実に立証するために、あとはクロカワの自白だけとなったのだ。

「しかし、正攻法ではないはずだ。そうなれば、お前も犯罪者ということになるな」

「へっ！　そんなことは、どうだって、いいんだよ。はぁ・・・はぁ・・・俺は、アンタを牢屋に、ぶち込みたかったそれだけだ！」

「ハセガワ！！」

二人の犯罪者の会話の途中叫んだのは、クロカワの横で座っていたカナさんだった。勢いよく立ち上がったのはいいものの恐怖で足が震えてしまっている。それでも、カナさんの目に迷いはなく、クロカワだけを見つめていた。

「私はもう、ハセガワではない」

「何を言っているのですか！！」

「少し、黙っててもらえますか？」

「っ！！」

クロカワはカナさんに銃を向けた。カナさんの目には、銃口から見える円形の闇と、冷血な目を持ったクロカワが映った。

「キリヤ、だったか？　最後に、もう一つ聞いておきたいことがある」

「はぁ・・・何だよ？」

「『小屋』の焼失にも、お前は関係しているのか？」

「小屋・・・？　焼失・・・？　あぁ、アンタらは、あれをそう呼んでるのか・・・」

キリヤは顔にびっしょりと汗をかき、息がマラソンでも走りきっ

たかのようにあがっていた。それでも無理をして、余裕があるように見せかける。

「焼失ってお前・・・実質やったのは、アンタらじゃねぇか」

キリヤは咳混じりだったが、淡々と話し始めた。

まずキリヤはスパイの仲間から、クロカワがとある一軒家に身を潜めているという情報を得た。すぐさまキリヤは証拠品を携え、自供をさせるためにその家へ向かい、押し入った。

しかし、そこには誰もおらず、山積みになった段ボールだけがそこにはあった。

恐る恐る段ボールの中を見ると、その中にあったの幾重にも重なった札束。おそらく洗いきれなくなったお金だろう。つまりこの洗浄できないマネーの置き場が『小屋』。

しかしその時、キリヤは気づいた。札束の下に、何かがあることに。

掘り起こすように探ってみると、そこにあったの時限爆弾。キリヤが見たときには爆発寸前だった。

キリヤは命の危機を察し、全速力でその場から逃走。キリヤがその家を飛び出した刹那に、それは爆破し家に火の手が上がった。

「ーーーーつまり、スパイが、俺を裏切っていたんだ。わざと嘘の情報を俺にリークして、金の証拠隠滅ついでに俺を・・・。はぁ・・・はぁ・・・。しかも、サクラングループの奴が、その辺に張っていたらしく、はぁ・・・俺が、その家を爆破したことにされて、指名手配だよ」

「ふむ。そこまでは報告されていなかったな・・・。新派の奴らめ」

キリヤはスパイであった仲間にコンタクトをとろうとしたが、す

でに音信不通であった。
　そして次の日、キリヤの家が燃やされた。支社はスパイからキリヤの情報を聞きだし、本格的に潰しにかかってきたのだ。
「はぁ・・・はぁ・・・。俺の家が、燃やされたのが一昨日。そして、今日。俺は、アンタがこのビルに入っていくのを見た。何せ身寄りが、無くて、一日中この辺にいたからな。タクシーに乗った、アンタを見つけた時は、心底驚いたよ」
　それを追いかけてみれば、何やら握手会が開かれるというサクランビルにキリヤはたどり着いた。クロカワが入っていってから約三十分。数名のオタク達が中に入っていくので、それに紛れることは容易だった。
「それで、今に至るわけ、か。そこにいる奴らを敢えてここに残したのは、お前のその話を、もしくは計画通りにいけば俺の自白をそいつらに聞かせるためだな？」
「はぁ・・・はぁ・・・。ご名答。だけど、アンタは俺を撃った。はぁ・・・はぁ・・・。これは、詐欺よりも、重い罪だ。これなら十分、アンタを牢屋にぶち込める・・・！！」
　キリヤは血だらけの指で、クロカワの後ろで控える報道陣を指さす。
「そこにあるカメラが、ばっちり、とらえたはず、だ。カメラでなくても、人の目も、あるしな」
「ふん。ならば、それも消してしまえば・・・問題ない」

クロカワは笑った。その笑みは不気味で、まるで悪魔のようだった。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

「マジで、どうなってんだよ・・・」

「レンジ、大丈夫か？」

「ア、アンザイか」

アンザイがレンジの肩に手を添え、心配する。キリヤの話はレンジやアンザイに、あの二人がいかにしてこの状況をつくり出したのかを正しく理解させた。ただ、クロカワの最後の発言が、レンジの背筋を凍らせた。

「消すって、消すってどういうことだよ」

「まぁ、つまり皆殺しってことだろうな」

「なんでアンタはそんなに落ち着いてられるんだよ！？」

「マジカルパワーだぴょん」

「ふざけてる場合じゃねェんだよ！！」

レンジは真剣な顔でアンザイに叫んだ。もしかしたらアンザイも恐怖しているのかもしれない。ただ、日を照り返すサングラスのせ

いでレンジにその表情は読みづらくなっている。

「おまえら」

クロカワは手を二回叩き、何者かをそこに呼んだ。それはちょうど、金持ちのお嬢様が召使いを召集するかのように。

「え・・・？」

クロカワの元へ駆けつけたのは、警備員二名。見て分かる通り、彼らとクロカワはグルだったのだ。

警備員の肉体は、鋼鉄のように堅そうで、手をパキパキ鳴らせている。

「こいつらを全員縛っておけ」

クロカワは警備員に命令し、この会場にいる者全員の手と足を、縄で縛らせた。その結び方は乱雑で、手をグルグル巻きにしていたが、いかんせん力が強いためちっとやそっとでは外せそうになかった。

１０／１５　明日は明日の風がブロウ　昨日は昨日の風がブリュウ

「いいか、おまえら」

百人のオタクと、三人の高校生、関係者数十名にカナさん。彼らは縄で縛られ、オタクの中には涙を流している者もいる。当然といえば当然かもしれない。

「口封じのために、おまえらはここで死んでもらう」

予想していたことだが、改まって聞くと心によく響く。ついに、大声を出して、いやだぁ！！　と泣きわめく者が現れ、空気は殺伐、混沌とした。

「ふん。さて、準備ができたようだな」

クロカワは悲鳴の一切を無視し横に一瞥を加えた。その目線の先にいるのは、時限爆弾に括りつけられたキリヤの姿があり、ロープの間から血液が滴っている。爆弾のモニターは、爆発まで残り十五分であることを示していた。

「スイッチでいつでも爆発できるやつもあるんだが、威力が弱くてね。それにさせてもらった」

「はぁ・・・はぁ・・・。この爆弾、『小屋』の時のやつと、似てるな。モニターの表示形式と、電子音が同じだ」

「詳しくは俺も知らない。同種かどうかはこいつら新派に聞いてくれ」

クロカワは親指で警備員達を指した。どうやら『小屋』の焼失事件を企んだのは、新派と呼ばれるサクラングループの新しい勢力らしい。サクラングループに革新を求める新派と、クロカワをリーダーとする保守旧派。覇権争いが絶えず、そのためかクロカワへの報告書にも不備が生じる。

今いるビルも、上の階の方は一つの『小屋』のようなもので、爆弾を含め怪しげなものがいくつも隠されていた。

「はぁ・・・はぁ・・・。まぁ、今更知っても・・・な」

おそらくこの爆弾が爆発すれば、サッカーコート一面分くらいの屋上は跡形もなく消え去るだろう。

「くく・・・。我々のヘリが来るまでの十五分、せいぜい死に怯えるがいい。ちなみにこの事件は、指名手配の爆弾魔の乱入及び自爆ってことにしておくから、何も問題はない」

クロカワの放った言葉が、その場の人間達を威圧した。

問題は大アリなのだ。自分達は、ただ殺される。世間で大きな変化があるわけもなく、あってもなくてもいいように、殺される。跡形もなく。

「不審な行動を起こしたら、即座に射殺するから。気をつけてな」

警備員に扮装していたクロカワのグルも、クロカワと同様に銃を持っていた。

場の空気が凍り付き、息すらままならないほどに重苦しい雰囲気

が漂った。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

皆が縛られてから十分程の時間が経った。キリヤの顔色は蒼白で、今にも気を失いそうだ。

（なんで、こんなことに・・・）

ユウキはそう思った。きっと他の者達も同様に考えていることだろう。

「ユウキ・・・？」

「・・・ツバメ」

「大丈夫？　顔色悪いわよ」

平気平気と言って、ユウキは強がってみせた。本当は、全身ガクガクだ。妙に冷たい汗も、服がずぶ濡れになるほどにかいていた。

対して横にいるツバメも、少し前方に見えるレンジやアンザイも、怖じ気づいている素振りを見せない。レンジとアンザイはバレないように会話をしている。

「嘘ばっかり。全身震えてるじゃない」

「・・・ツバメは怖く、ないのか・・・？」

「怖いに決まってるじゃない」

ツバメの顔には微かに余裕が見て取れる。全然怖がっているようには到底見えなかった。

「ビビってたって、何も始まらないでしょ？　確かに今の状況、助かる可能性はゼロに近いかもだけど」

沈黙したユウキに向けて、ツバメは言葉を発する。その言葉達には力があって、重みがあって、勇気を伴っていて。何より、希望に満ちている。これこそ、ツバメがそうやって、何事にも諦めず生きてきたことの証だった。

「ゼロじゃないから。必ず助かる、そう信じてれば、何かほんとに助かる気がしてこない？」

「ツバメ・・・」

「まずはそうやって信じ込むことからじゃない？　でないと、何も始まらないし」

ユウキはハッとした。

もしかしたら、こんな状況だったからかもしれない。今の命の危機が、創り出したのかもしれない。

分からないけれど、ユウキの心に、小さな明かりが灯ったのは確かだった。

ーーーーそうか。

ツバメのこの目だ。自分が恋をした理由は。ユウキはツバメの瞳

にある炎に触れた瞬間、自分の弱さを見せつけられた。
いくら精神修行をしたって追いつけないような光が、ユウキの目の前には横たわっていた。後ろを振り向いたって、そこにあるのはチキンな過去だけ。
だからこそ、そう思った刹那、ユウキはハッとしたのだ。

ーーーーなんで忘れてたんだろう。

俺は、つい最近までチキンな過去を忘れてしまっていた。思い出してさえいれば、一昨日のようなトラウマは感じずにいられたのに。
今更気づいたって遅い。俺が、チキンな過去を忘れてしまっていた理由。
こんなに、簡単なことだったなんて。

ーーーーただ、忘れたかっただけだ。

そういえば野良犬から隠れた俺は、あの後家で泣いてたんだ。自分の腑甲斐なさに。あの頃はまだなんで悲しいのか、それすら分からなかったけど、涙の雨が止んだ頃には、次は俺がツバメを守るんだって決意してた。
お化け屋敷が怖くて、ツバメに縋ったあの夜も、泣いたんだ。俺はなにやってんだろって。でもやっぱり夜があける頃には、もう怖がらないって決心して、怖いＤＶＤを借りて、一日中見てた。
そうやって、未来ばかりを見て、要らない過去を置き去りにして、今だけを、信じてたんだ。
信じれば何かが始まる。裏を返せば、信じないと何も始まらない。
そう思って、一心不乱に、真っ直ぐ、そして何より必死になってツバメを追いかけてた。だから、過去はずっと後ろの方へ後ろの方へと、追いやってしまっていたのだ。
悲しいことは忘れよう。そう思って、しまってたんだ。そうする

ことが正しいんだって、信じていた。
本当に必死だった。一途に、ツバメだけを想ってた。
何度諦め、終わらせようとした恋でも、ツバメの笑顔をみる度に、ユウキの中の歯車は周りだし、また『道』を歩ませる。
それこそが正しいことだ、これが恋だ、と思いこみ、信じてしまった。
でもそれだけじゃ駄目なんだってことに、今気づいた。
『道』を振り返った時、後ろの方に見えないほど小さくなってしまった過去がある。けれど、大切なものが、その過去にはある。

ーーーー自分の残した足跡まで、置いてきてしまってたんだ。

たかが一歩。されど一歩。
思い返せば、野良犬のことやお化け屋敷だけじゃない、無数の忘れたい過去がある。
それすら背負わなければ、いけなかったんだ。
嫌な過去、辛い過去、忘れたい過去。まだまだ沢山あるけれど、どれも自分にとって大切なもの。
幾つもの苦しみを背負って前に進まなければ、意味がない。なぜなら、それじゃ前に進んだ自分は、本当の自分じゃないから。
俺は、これが本当の自分だって、過去を忘れて今を生きる自分こそ真の自分だって、信じていた。
きっと、信じていれば、自分の世界だけではそれが、真実になり得ていたのかもしれない。
でも、恋は一人じゃない。他の人がいて、その人ととの思い出すら信じられたときに、想いは伝わるはずだ。ゴールに、ちゃんとたどり着けるはずなんだ。

ーーーーそれを忘れて、忘れたことすら忘れて・・・。俺は・・・。

ちゃんと過去を見なければ。
過去をその小さな背中で、背負わなければ。
時間が経つにつれて、その過去は重みを増していく。もしかしたら、その重みに俺は耐えられないかもしれない。一歩も踏み出せず、また涙を流すかもしれない。
でも、一歩だけ踏み出せたなら、今の『道』には、過去の重みの分、しっかりとした足跡が残るはずだ。誰にも消せやしない、深々とめりこんだ足跡が。
もう振り返らない。振り返る必要はない。だって、過去は自分だから。過去が、今の自分をつくってるから。そうやって、今度こそこれが本当の自分だって、胸を張れるから。

「ツバメ・・・」

迷いのないユウキの瞳は、ツバメだけを見つめていた。ツバメを信じ、ツバメとの過去や思い出を信じ、自分を信じる。

「・・・何？」

魔法の二文字を、急に叫んだら、困惑するだろうか。うちはそんな風に思ってないって、いつもの毒のある言葉とともに一蹴するだろうか。
たくさんの不安がユウキの心にのし掛かる。しかし、ユウキの今の心には、もどかしさという大切な埃が積もりに積もって、溢れだしている。
明日の命も危ない今の状況が、直接そうさせたわけじゃない。確かに、最後くらい思いを伝えようとは考える。
でも、ユウキは心から助かると信じていた。だからこれは最後じゃない。

ーーーー最初の、足跡を残す言葉だ。

気づいたから。本当のことに。

そして分かったから。たとえ、振られようとも、それすら過去になって、大きな足跡を残してくれるって。

「あ、あのさ、俺・・・」

「・・・・・・」

突如畏まったユウキに、ツバメは驚いた。しかしユウキの目を見たとき、その気持ちは消え去った。

「・・・俺・・・俺！！　ツバメのことが・・・！！」

その時、目を瞑るほどの激しい風が吹き荒れた。その風はユウキとツバメの横顔を殴りつけ、ゴゥッと音をたてている。

二人は黙り込んで、音のする方を見た。

「やっと来たか」

クロカワの真上には、すぐそこまでヘリコプターが来ていた。これこそ、死への合図。

ヘリコプターからロープで繋がった梯子が垂れ、クロカワがそれに捕まった。

「じゃぁな、一般人。俺のために、死んでくれ」

警備員も梯子に捕まろうとした、ちょうどその時。

「んっ！　な、うぅっ・・・！！」

クロカワは頭を押さえてその場で立ち眩みを起こしたのだ。そして銃をとりこぼす。しかし、梯子からは手を離さず、そのまま爆発から逃げようとした。

「ぐ、ぐうおおぉぉっ！！！」

その時キリヤが叫び、立ち上がった。巨大時限爆弾ごと。

頭には血管の線が迸り（ほとばし）、腹からは血が流れる。しかし、そんなことは一切お構いなしに、今まで蒼白だった顔面を真っ赤にしてクロカワへ飛びついた。

一瞬の隙をつき、キリヤはクロカワにしがみつく。

「逃がさねぇっ！！　てめぇも、ここで死ぬんだっ！！」

「がっ！！　おい、お前等ぁ！！」

最後の力を振り絞り、キリヤはクロカワを押さえる。爆弾の重みもあってか、クロカワを梯子から引きずりおろし、地面へと叩きつけた。

クロカワは警備員に自分を助けるよう指示する。

しかし。

「おらァッ！！」

「どっせいっ！！」

今度は、レンジとアンザイが警備員達に向かって飛んだ。その体に縛られた部位はなく、まったく自由の身で跳び蹴りを、警備員に

くらわせる。そしてマウントポジションをとり、動けなくした。

「え・・・？　レンジ・・・？　アンザイ・・・？」

「ユウキ、ちょっと見て！！」

「え？　ええ？　ええっ！？」

オタク達が全員立ち上がっている。彼らの手は縛られたロープからいともたやすく抜け、足のロープは、はさみのようなもので解いていた。

「何が、どうなって・・・？」

そんな表情を浮かべていたのは、ユウキとツバメだけではない。カナさん含め、会場関係者、そしてクロカワ達までもポカンとした顔をしていた。

「簡単なことですよ」

再起動したエレベーターに逃げ込むオタク達の群。

横にある階段で七階分下りると、エレベーターが十七個あるフロアに出る。だから階段の方に駆け込む者も少なくない。エレベーターは、オタク達がラッシュアワーの如く飛び乗るもんだから、とてもじゃないが、全員はさばけない。

そんな中、一人のオタクがはさみを携え、ツバメのロープを解きにきてくれていた。

「簡単なこと・・・？」

「ええ。『マジカルゲッチュー』秘伝、縄抜けの術です」

そのオタクは手で、バレーボールのレシーブのような形をつくった。それはちょうど四日前、ユウキ達が行った指スマのよう。

ただ、相違点が一つだけあった。それは親指をクロスしているということ。

「縛り方、少し雑だったでしょ？　手ごとグルグル巻きにして」

「え、ええ・・・」

「この手の形で縛られると、簡単に解けるんです」

解けるといっても実質的には、抜けるといった方が正しい。

通常、人間の力の範囲において、どんなに強く縛っても、指の一本や二本は微かに動かせる。だから、オタク達は縄の中でクロスした親指を元の形、つまり指スマの形態に戻したのだ。

そうすることで、縛られたロープに若干の隙間ができる。どんな風に縛っていても、隙間ができれば簡単に抜けられるのだ。

「これはね、清涼院アスカの師匠、清涼院コフンがアスカに教えた術で、第四話『アスカ、縛られる』の番外編『ジュゲーム、ミートボールと呼ばれる』で実際にアスカが使用したんだ。登場はこれっきりだったけど、『マジカルゲッチュー』でも珍しい、エッチなエピソードだったからね、ファンの間では結構浸透しているんだ。あっ、ちなみにジュゲームていうのは、マリモみたいな姿の山田中島之上君麿の弟、ヴァリュエンスピー・ダイナマイ佐々木のストラップで・・・」

「長ーいっ！！　早く解けっ！！」

「あっ、そうだった。ごめんごめん」

ツバメが甲高い声で高らかに叫んだ。オタクはツバメの手首に巻かれたロープを、持参していたハサミで切った。足首の方も切ろうとしたが、ツバメはそれを拒絶。自分でやる、と言って、オタクからハサミを奪った。

「あの、俺は・・・？」

「え。あ、うん。今助ける」

ユウキの存在は、間違いなく忘れ去られていた。

11／15　燎原フレイム

「おい、このままでいいのか？」

「助けようよ」

「おいお前等も・・・」

一人のオタクが一人の少女を救った。ついでに隣にいた奴も助けた。この事実が、オタク達の良心を突き動かし、救助活動へと導いていった。

「何か、すげぇな・・・」

「うん・・・」

確かに何人かはもう逃げた。高速エレベーターだから、もしかしたら既に地上に到達したかもしれない。

しかし、この場に残ったオタク達がいる。彼らは、まだ縛られて動けない関係者達のロープを、総出で解きにかかっていた。ユウキとツバメには、目の前に広がる光景が少し奇妙に見えてしまっていた。

「おい！　早く爆弾止めろ！」

レンジの叫び声が周りに響いた。警備員の体にのし掛かったまま、クロカワに指を刺している。巨大な時限爆弾はオタク達の力により、

キリヤから切り離されたものの、刻々とタイムリミットを減らしているからだ。

「分かったよ。でも、これじゃ動けないな」

クロカワはわざとらしく皮肉りながら、自分を押さえ込んでいるキリヤに目をやった。

キリヤは、ゆっくりとクロカワの体から離れ、クロカワを自由の身にした。しかし、クロカワに銃を突きつけることは決して忘れない。

「ふぅ・・・さて、と」

「ん？　あいつ・・・」

ユウキはクロカワを見て何か不振な点に気づいた。

クロカワは何やらキリヤ達の死角で、手首をごにょごにょしている。

「あれって・・・？　ちょっ！　何だあれ！」

その時ユウキが勢いよく立ち上がった。急に動くもんだから、ツバメは肩をすくめて、ひゃっ、と声を上げて驚いた。

ユウキはクロカワがニヒルに笑うのを見た。そして、腕時計の中からスイッチらしき物を取り出すのも。

「くくっ・・・」

「待てっ！！」

ユウキの体は勝手に動いていた。間に合いそうにないことも理解していた上で、全力疾走していた。
きっと、今までの自分だったらこんなこと、できやしないだろう、とユウキは操縦のきかない体のまま、思った。
何か行動することに意義がある。例え結果が伴わなくても。ただ、今回ばかりは最悪の結果がそこに待ち受けていた。

ズドオォンッ！！

ユウキは間に合わず、爆裂音が床を揺らす。同時に、皆に膝が崩れるほどの振動が伝わった。空気の波が、ユウキの鼓膜を襲う。気持ちが悪くなるほどの白い光が、周辺一帯を包んだ。

「ぐわぁっ！！」

「きゃっ！！」

「くッ！！　何だ！？」

この場は爆破されていない。ならばさっきの爆発音は何だ、と皆が思った、その直後。

「うおっ！！」

屋上の床が傾いていた。バキバキと音をたててその傾斜はゆっくりと上がる。
開会式のために設けられた簡易ステージにマイク、アンプ、人工観葉植物。これらが全て、独りでに動き出した。

「下を爆破しやがった・・・！！」

クロカワが取り出したのは紛れもない、ユウキの見間違いじゃない、爆破スイッチ。それとつながる爆弾は屋上より三階下の端にあったのだ。元々は使用する予定などなかったが。
その爆弾は、カナさん達のいる場所のちょうど真下の方で爆発。ビルの側面を吹き飛ばし、ガラスが無人の駐車場へ降り注ぐ。
キリヤは爆破の衝撃でよろけ、クロカワの姿を一瞬見失ってしまっていた。クロカワはその隙にヘリコプターの梯子に掴まり、逃亡をはかっていた。

「しゃ、社長っ！！　わたしらは！！」

「悪いな。お前等までは助けられそうにない」

警備員二人が叫んだのに対し、クロカワはまったく意のこもらない謝罪を送った。クロカワをぶら下げたヘリコプターは少しづつ高度を上げ、キリヤ達から離れる。

「くそぉっ！！　クロカワぁっ！！」

キリヤが叫ぶ。

「ちくしょォ！！」

レンジが叫ぶ。
皆が諦めかけた、その時。

「ん？　なっ！？」

「うらぁぁっ！！！」

「でぇぇいっ！！！」

クロカワに飛びついた、二人の姿があった。

「ユウキ！！　ツバメ！！」

ヘリコプターはキリヤやレンジ達から離れるとともに、エレベーターの方に近づいていた。そこへ、ユウキとツバメが渾身の力で飛びついたのだ。

クロカワは右足をユウキに、左足をツバメに捕まれ、屋上の床に再び叩き落とされた。

「ぐあっ！！」

あとは押さえ込むだけ。ツバメがクロカワの体を押さえ込もうとしたその瞬間、ユウキの目には鋭利で、太陽光で輝いている、銀色のナイフが映った。

クロカワはそれでツバメを切り裂こうとしている。

「ツバメぇっ！！」

「え・・・？」

ツバメの目に、ナイフの先が飛び込んでくる。まるでそれはスローモーションのように。

そして、鮮血な血が、床に滴った。

「いつっ・・・！！」

「ユウキ！！」

流れ出る血の元を辿ると、そこにあるのはユウキの足であった。間一髪間に合って、ツバメを庇えたようだ。しかし、ナイフが深々とユウキの脹ら脛に刺さり、血が滲み、床に垂れている。

ユウキは激痛に耐えた。なるべく、ツバメに格好悪いところ見せないために。

「くそがぁっ！！」

ツバメが呆然と座り込んでいたところ、クロカワはもう一度ヘリコプターの梯子を掴もうと、立ち上がって手を延ばした。

ズドォォンッ！！

どこからともなく再び爆裂音。

「なにっ！！」

クロカワの視界はぐらつき、世界が反転する。

キリヤに取り付けられていた時限爆弾が爆発したらしかった。ただそれはこの場で、ではない。

床が傾き、事故防止用の柵の一部分に器具やら道具やらがつもり、ついに柵を倒壊させてしまっていた。その下は、大きな駐車場で、休日であったので人は一人もおらず、けが人は出ていない。

しかし、問題はそこではなく、その開いた隙間から、傾斜で滑った時限爆弾が落ちてしまったことだった。ちょうど爆弾は、落下中にビルの真ん中より少し上の辺りで爆発し、ビルの側面をさらに吹き飛ばした。

今ある状況を完全に理解する者は、この場には誰一人としていな

かった。それでも、全員が傾く床を見てこの状況はまずいと思っている。

「まずいな・・・。全員、早く逃げろっ！！」

アンザイが叫び、それを合図にロープを解き終わったオタク達と、ロープを解いてもらった関係者達が走った。皆、安心と不安が入り交じった、非常に複雑な表情をしていた。

「階段で七つ下に行けば、別のエレベーターがあるフロアに出る！！　そこのエレベーターに乗り損なった奴は、階段で下りるんだ！！」

アンザイの指示が皆を動かした。

当初はやれ俺が先だの、やれ私が先だの言っていた者達も、この危機を経験した者同士、連帯感を感じたのか。怪我をした者に優先的にエレベーターを譲り、至極効率良く逃げることができていた。

また、何人かはユウキやツバメの代わりにクロカワを押さえ込み、連行しようとしていた。

そして怪我をしたユウキの元へ、一人のオタクが話しかけた。

「大丈夫かい！？　運ぼうか！？」

「大丈夫。ありがとう。片足くらいなら、歩けるから」

ユウキは嬉しかった。見も知らずの人が、自分の心配をしてくれている。こんな状況でそんなことを思うのは失礼だろうか。

たとえそうであっても、嬉しいという気持ちには変わりはない。

12／15　デスパレート

「あッ！！　アンザイ！！」

「むっ！！」

ヘリコプターが、ユウキ達のいるエレベーターの方とは逆の方向、つまり床が傾いた方向にいるレンジやアンザイの元へ、方向転換して飛んできていた。

垂れた梯子に、警備員達が飛び乗る。どうやら先ほどの二発の爆発で押さえ込みがなくなっていたようだ。

「くそッ！！　逃げられたぞ！！」

「なっ・・・お前等ぁ！！　裏切ったなっ！！」

これでおあいこ。警備員二人からそんな声が聞こえた。クロカワは歯を食いしばって悔しがっている。目は血走り、血の涙を流す寸前のように見えた。

計画通りにいかなかった悔しさ。裏切られたことへの憎しみ。這い蹲っている自分の惨めさ。クロカワの頭はそれらを押さえ込めるほど、大きな容量は持ち合わせていなかった。

「く、そ、がああぁぁっ！！！」

クロカワは鬼のように暴れだし、それを何人かのオタクが押さえ込む。しかし怒りに満ち満ちていたクロカワは、それらをも振り払い、ナイフを拾い上げてそれを振り回した。

運命様はそれが気に食わなかったのか。クロカワに天罰を食らわ

せようとした。クロカワのところへ、会場に設置されていた人工の木が、倒れ込んできたのだ。クロカワはそれに反応しきれず、近づいてくる人工樹の幹を見ることしかできなかった。

「危ねえぇっ！！」

「きゃっ！！　ユウキ！？」

ユウキがクロカワに飛びつき、横から倒れてきた木にクロカワが直撃するのを紙一重で回避した。

しかし、それで終わりではなかった。

倒れた木は、床の傾斜のせいで動き、傾いた方にいたユウキとクロカワを浚(さら)った。

木の重心は、鉢の方にあり、ユウキとクロカワは斜めの方向に流され、壁に直撃した。

「がっ！！」

「くっ！！」

「ユウキぃっ！！」

ツバメが声を荒げて叫び、ユウキの元へ走った。それを追うように、レンジもユウキのところへ駆けた。

オタク達はエレベーターを開けて待っていたが、爆発の衝撃で著しく気を悪くしている者が多い。だから、ユウキ達を待たずエレベーターを閉じた。助かるためにはそうすることしかできず、仕方がないことだった。

「早く、柵が壊れる前に・・・！！」

「分かってるてェ！！」

煙が周りを覆い、視界が霞む。息もしづらい。柵の隙間から見えた外の光景は、来た時に見たそれとはまったく違うもののようであった。

ツバメとレンジはユウキの手を精一杯引っ張るが、汗で滑ったり、ユウキの体が木の枝に引っかかったりして、上手く助けられずにいた。しかしそれでも、ツバメとレンジは歯を食いしばってユウキを引っ張りだし、救出することができた。

「サ、サンキュ・・・」

「ッたくよォ」

「早く、うちらも避難しなくちゃ！！」

こんな状況下であっても、ユウキは嬉しい、とまず最初に感じた。自らの身を省みず、自分のことを助けてくれた友が。想い人が。

しかしユウキはまたしても足を怪我してしまったようだった。それも、刺された方ではない足を。

ユウキは立ち上がることにすら四苦八苦し、息を荒げた。

「アンザイにはキリヤ背負ッて階段で逃げてもらッた。残りは俺らだけだ！　早く逃げるぞッ！！　ユウキは俺がおぶるから！！」

「レンジ・・・待ってくれ」

ユウキは汗を払いながら言った。そして、クロカワの方を見る。クロカワは気を失い、目を閉じて、まるで眠っているかのよう。

「おい待てッて！！　こいつは俺らを殺そうとした奴だぞ！！」

「分かってる・・・。こいつがしたことは、許されることじゃねぇ」

黒い煙が風で一時的に吹き飛び、ユウキ達の背中に風とともに熱気がはりついた。

床が揺れる。そろそろ逃げないと本当にまずいことになるかもしれない。

「でも、それでも、俺らが見捨てていい理由にはならないはずだ。それに、キリヤとかいう奴も言ってたろ？　こいつは、ちゃんと裁かれるべきなんだ。刑務所で、罪を償うべきなんだ。・・・だから、頼むレンジ、ツバメ。こいつも、助けてやれないか？」

「でも・・・」

ツバメもクロカワを助けることには賛成ではなかった。かといって反対、というわけでもない。

床がまた揺れた。その揺れのせいでユウキの足に限界が来てしまい、ユウキは大きな尻餅をついた。

「ユウキッ！！」

「・・・頼むよ。あいつも助けてやってくれよ」

偽善者にでもなったつもりか。それも飛び越えて神父になったつもりか。ユウキの頭は、自分の言っていることの重さを測れるほど精巧にできていなかった。

ただ、死んでほしくない。そう思うことしか、ユウキにはできな

かった。
上半身を起こし涙を浮かべて、ユウキはツバメとレンジに嘆願した。頼む、頼む、と繰り返して。
「・・・はァ、しャーねェーな・・・」
「・・・まったくよ」
ツバメが木をほんの少しだけ浮かせ、レンジはクロカワの肩に手を回し、無理矢理引き上げる。
「確かに、ユウキの言う通りだ。見捨てちゃ、いけねェな。よし、ユウキ。俺の肩に掴まれ。早く逃げるぞ！！」
「あ、ああ。悪い、レン・・・」
ユウキが足の激痛で床に完全に倒れ込んでしまった。左足の脹ら脛からは、絶えず血が流れ出ている。ユウキは声すら出なくなるほどに苦しがった。
レンジは急いでクロカワを肩に担いだまま、ユウキも一緒に肩に乗っけようとする。しかし、それをツバメは阻止した。
「大丈夫レンジ。ユウキは、うちがおんぶするから」
「・・・ツバメ・・・？」
だがツバメはユウキの胴体を自分の背中に密着させ、一気に持ち上げて背負った。突如かかった重力に、ミクロなツバメの体は支えきれず一瞬転けそうになるが、ツバメはすぐに立て直した。

「無茶だッて！！」

「レンジが二人を担ぐことの方が無茶よ。それに、うちだけ、何もしないなんて嫌だから。ユウキには庇ってもらった恩があるし」

だから、ユウキはうちにまかせて。

そう言って、ツバメは枝のように細い足で、のしかかる重力に耐えた。ユウキは意識が朦朧としてきたのか、ツバメに体を完全に預けてしまっていた。そしてほどなくして眠ったかのように気を失った。

ツバメとレンジはそれぞれ人を背負ったまま、傾いた床をまるで山を上るようにして進み、やっとのことでエレベーターの元までたどり着く。しかし。

「嘘・・・」

「マジかよ・・・」

ツバメとレンジは絶望した。

エレベーターの扉が開かないのだ。何度ボタンを押したって、ランプの一つもつかない。高速エレベーターならもう往復してもいい頃なのに、だ。

二度目の爆破時にはまだ正常に動いていた。これはつまり、ビルの損傷が回ってきているということだった。

「階段で逃げるぞッ！！　七つ下の階には他のエレベーターがあッから、それに乗ろう！！」

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

「はぁ・・・はぁ・・・」

「大丈夫かツバメ・・・？」

階段の一段一段が辛い。ツバメはバランスをとりながら、転げ落ちないように細心の注意を払って次の一歩を踏み出す。

真っ黒な煤煙が立ちこめ、ひび割れた天井からは灰色の粉塵が降り注ぐ。鼻の奥を貫くような匂いもした。

「平気・・・。あと一階でしょ？　もう、少し」

このビルの上層部はもう今にも崩れ落ちそうなのだ。実際、ビルに使われているコンクリートが天井から落下したような形跡が見られる。

そこかしこに転がる岩石を避けながら、ツバメとレンジが最後の階段を降りようとした時だった。

籠もるような爆発音が聞こえた。それも、音源は案外近いかもしれない。

「きゃっ！！」

「くッ！！」

二人は足を止め、床の震動に耐えた。直後、ガラスが割れる音、何かが倒れる音、太い紐がちぎれるような音が同時にした。

「早く、しねェと」

「うん・・・」

まるで夢の中にいるようだ。リアリティのある嘘みたいなシチュエーション。感じる感覚は作られたようにフワフワとしていて、自分が自分でない。

たぎる汗やひしひしと全身に伝わる熱気。ツバメの足は大きすぎる荷重に耐えられず、折れてしまいそうだった。

そうして二人はやっとのことでエレベーターのあるフロアに着いた。

「よし、ここだ」

レンジが重い扉を開く。

二人の目の前に映る光景は、まるで地獄絵図だった。このフロアは円の形状をしていて、その側面の一部に等間隔で十七個のエレベーターが並ぶ。

しかしちょうど二人がいる場所の向こう側の側面に巨大な穴が開き、そこから真っ黒な塵芥が沸き上がっている。それを含んだ煙が、天井に暗黒の空を形成していた。

破損箇所は鉄材がむき出しになり、紅蓮の劫火が噴き上がっている。

「くそッ！！　なんでだッ！！」

レンジは一番近いエレベーターの扉を開けようとするが、スイッチを押しても、うんともすんともしない。レンジは悔しがって何度も押すが、それは全くの無駄だった。

跡形もなく吹き飛ばされたエレベーターもある。制御がきかず、扉を開いたり閉じたりしているそれもある。

十七個中、十五個のエレベーターを調べた。しかし、そのどれも

が使えそうにない。
そして、新たな爆裂音。ここは一応『小屋』であり、そこら中に爆弾の類が大量にある。ただ、レンジ達がそれを知る由もない。
刻々と迫るタイムリミットが、二人を焦らせる。目元に浮かぶ水滴はもう汗なのか涙なのか、まったく分からなくなっていた。

「ツバメ！！　これ使えそうだ！！」

レンジがやっとのことで動きそうなエレベーターを見つけだした。それは、四人が来るときに乗ったエレベーターであった。つまり、そのエレベーターに乗れば地上まで一直線ということ。
レンジはそのエレベーターの前に立って横についたスイッチを押す。頭上の数字が徐々にツバメとレンジの元へエレベーターが近づいていることを示した。

「よし、これなら！！」

レンジの顔から笑みがこぼれた。それにつづいてツバメも笑う。
やっと助かる。
この悪夢から覚めることができる。
レンジは希望の光を掴むように手を伸ばし、そのエレベーターに乗り込んだ。そのエレベーターの中には下でオタク達が呼んだ救急隊員が二名いた。

「ここにいましたか！！　さ、早く乗って下さい！！」

「きゃっ！！」

「ツバメッ！！」

ツバメは、乗り込む寸前で後ろに倒れてしまった。気を抜いてしまったのか、ユウキの重みに耐えきれなくなったのか、それともそのどちらでもあるのか。
ツバメは安堵の息を漏らし、微笑んだ。
レンジはそれを見て、ッたく、と言って手をツバメに差し出そうとした。
しかし、運命様はそれを面白く思わなかったようで、更なる試練を二人に与えた。

「おわッ！！　何だよコレ！？」

「えっ・・・？」

エレベーターの前に柱のような、大きなコンクリートが一つ、ズガンと音をたてて落下してきたのだ。それもちょうど、レンジとツバメを分けるようにして。
ガラガラと音を立てて岩がツバメの前に、エレベーターの入り口の隙間を埋めるように積もっていく。徐々にレンジの姿が見えなくなり、最終的には頭一つ分の隙間しかなくなってしまった。
所々に隙間はあるものの、決してツバメが通れるほどの大きさではなかった。

「う・・・そ・・・」

「くッ！！　どうなッてんだよ！？」

落ちた灰色の岩は、ツバメ達の近くだけではなく、そこら中に落下していた。今にも、ビル内が崩れそうな勢いだ。

「ぐ、ぐァッ！！　くそッ！！」

「く、なんだこれは・・・！！」

レンジはクロカワを一旦置き、救急隊員とともに必死にコンクリートをどけようとした。しかし、レンジの爪が割れようが、関節近くから血が出ようが、ビクともしなかった。

「待ってろツバメッ！！　今どけッから！！」

レンジは痛みに耐えながら、コンクリートの塊を崩そうとしていた。ツバメの目に飛び込んでくるのは、悲痛に歪むレンジの表情だけだった。

そして、そんな顔は見たくないと思った。

「くそッ！！　くそッ！！」

「・・・レンジ、ごめんね」

最初から分かっていたのかもしれない。この壁は壊せない。でも、可能性はゼロじゃない。ゼロでない限り、諦めるわけにはいかない。

「平気だよッと！！　おらッ！！」

「堅いな・・・！！　くそっ！！」

救急隊員の二人は、腰からドリルのような器具を取り出し、コンクリートを破壊しようとした。

しかし、壁は崩れなかった。

なぜなら、そのコンクリートはサクラングループが独自に開発した超硬度のそれだったからだ。二つの簡易ドリルの先は、バキンッ

と音をたてて折れ曲がってしまった。

「嘘・・・だろ？」

「・・・ちッ！！　待ッてろツバメ！！　今すぐ壊すからなッ！！」

レンジはわざと笑いながらコンクリートの壁を蹴った。しかし、壁は動く気配すらしない。徐々に絶望がツバメの周りを覆っていく。ツバメは、それを振り払うように落ちていたコンクリートで壁を殴りつけ、レンジに応戦した。

「えいっ！！」

しかし、むしろ絶望と不安は増大するばかりであった。

コンクリートの壁の堅さが、尋常じゃない。高校生男子と、成人男性二人が協力しても崩せないのだ。

とてもじゃないが、人間の力のみで壊せるような代物ではなかった。それに、そこら中に舞う煤煙が呼吸を著しく妨げている。

それでもツバメは負けじとコンクリートの破片を振るった。

「えいっ！！　えいっ！　えい・・・」

段々と、力が抜けていくのが分かる。

こんな恐怖初めてだ。少し、気持ち悪くなってきた。

「ツバ、メ・・・？」

「あ、れ・・・」

ツバメの目には涙が溢れていた。泣いてる場合じゃない。そう思

いながらも、涙は流れ続けた。
それに気づいたツバメは、立ち尽くしてしまった。どうしようもない絶望と、不安、そして恐怖に飲まれてしまっていた。
もう、一筋の光すら見えない。

「もう・・・無理、なのかな」

「ダイジョブかツバメッ！」

レンジの声すらツバメには届かなかった。ただ、涙を止めることに精一杯で、他のことにまわす力は、これっぽちも残っていなかった。今まで溜めてきた涙が、一気に溢れている気がする。

「もう・・・駄目・・・」

「ツバメェッ！！」

「レンジ・・・先・・・行ってよ」

「何言ッてんだ！！　ろくでもねェこと言うんじゃねェ！！」

初めて見る顔と、初めて聞く声に、ツバメは少し驚いた。それでも、ツバメは怖じ気付くことなく続けた。

「先行ってよ。うちらは階段で行くから。もう七階分降りたら、また別系統のエレベーターがあるって、アンザイから聞いた。うちらはそれに乗っていく」

「ダメだッ！！　お前も分かッてるだろ！？　時間がねェんだ！！」

レンジは叫びながらも、目の前の壁を壊そうとしていた。
しかしもうこれ以上、ツバメは耐えられなかった。
「先に行ってよ！！　お願いだから！！　うちのせいで、死んでほしくないの！！」
突如変化したツバメの声色に、レンジは呆然と立ち尽くした。ツバメの声は所々で詰まり、涙を堪えているのが明確に分かった。
レンジの耳に入ってくるのは、炎の燃えたぎる音と、自分の荒い息とツバメの泣き声。
レンジの拳に、今更痛みが伝わってきた。
「・・・やッぱダメだッ。置いていくなんて・・・できねェ！」
「レンジっ！！」
今のツバメの瞳は、クロカワの命を思ったユウキの瞳そのものだった。
真に願う瞳。心からそう思う瞳。一切の疑いも、他力も含まない、真っ直ぐな瞳。体力は底を尽きて、弱々しいけど強い瞳。
ツバメはお願いだから、と続けた。
「ダメだッつッてんだ！！」
「レンジっ！！　お願い！！　うちの言う通りにしてよ！！　・・・絶対、助かってみせるから。お願い・・・先に行って！！」
「ッ・・・・・・！！」
救急隊員も、それが最善の策だと思っていた。ここでいつまでも

時間をくっていたら、ここにいる六人は全員死んでしまう。
救急隊員の一人が、レンジの肩に手を乗せた。
「もう、それしかありません。彼女を、信じましょう」
なんでこうなるんだ。俺にできることは何もないのかよ。なんでここにいるのが俺で、目の前で泣いてんのがツバメなんだよ。
神様。頼むからツバメと俺の立場を入れ替えてくれ。俺ならユウキを担いで七階下まですぐに降りられるんだ。
なぁ。聞いてんのかよ。助けろッつッてんだよ。
おい。何とか言えよ。
「・・・・・・くそッ！！」
レンジは黙って、エレベーターのボタンを殴った。エレベーターは一階のランプを点滅させ、ゆっくりと扉を閉めた。レンジは、なんでこういうときに限って扉が綺麗に、そしてスムーズに閉まるのか不思議に思えた。
静かに速度を上げ、扉についたガラスから見えるコンクリートの群が、徐々に地面とともに上がっていく。
レンジの体は震える。空気は熱のせいで暑いのに、寒気がした。
「ふざけんな・・・」
ユウキとツバメを、あのフロアに置いてきてしまった。また戻ってくる時には、破損の進み具合からして、ビルの上の部分はもう倒壊しているだろう。
レンジは壁に凭(もた)れて座り込み、俯いた。自分がしたこと本当に正しかったのか。

「ほんとに、ふざけんな・・・」

正しいわけがない。仲間を置いて自分だけ逃げるなんて。

ツバメは、泣いていた。

俺のしたことは、間違ってたんだ。

そう思ったところで、もうエレベーターは止まってくれなかった。なぜなら、レンジの乗っているエレベーターは、この先一階しか止まれないから。

「ふ、ざ、け、んなああァァッ！！！」

「き、君！！」

レンジは痛めた両手を地面に強く、叩きつけた。

「ふざけんなァッ！！　今すぐ止まれッ！！　今ッ！！　止まれッ！！　止まれよッ！！　止まれッてェ！！」

「お、落ち着いて！！」

痛みをはらんだその声は、どこにも届かず、宙を漂うばかりだった。

「止まれええェェッ！！！」

レンジの両手には激しい痛みが迸った。指が紫になるまで床や壁を殴りつけ、どうにかして止めようとする。

しかしエレベーターは、無機質にレンジとクロカワを地上へと運んだ。

「ッ・・・・！！」

レンジは気を失ったクロカワに詰め寄り、拳を上げた。

（こいつのせいで・・・全部、こいつのせいで・・・・！！）

しかし、その顔を殴ることは出来なかった。レンジの脳に残るユウキの言葉が、そうさせたのだ。

レンジは本気で殺したい衝動を、無理矢理宥め、再び床を殴る。その時、妙に生々しい音がした。手の中で何かが、折れる音が。

「くそおおォォッッ！！！」

レンジは何もすることができず、その場に座り込んだ。

13／15　デッドフィオーレ咲くものか

ツバメは涙を制服の袖で拭った。たかが布切れ一枚で受け止めきれるほどの量ではないことは分かっていた。それでも視界がなるべく霞まないように、ユウキをちゃんと見るために、その涙を拭き取った。

そして、ゆっくりとユウキの体を自分の体に預けさせ、ユウキの両足を抱えておぶる。

「いつっ・・・！！」

細い両足を襲う痛みに耐えながら、ツバメはまだ調べていない、たった一つのエレベーターに向かった。しかし、やはり動くことはなかった。

気づけば、火災用のスプリンクラーが作動し、辺り一面に雨を降らしていた。

（やっぱり、動かないか。早く、階段で逃げなきゃ）

室内に降り注ぐ雨はでこぼこになった床に水たまりをつくるが、その水面は今の状況を映し出し、ツバメが下を向いてもその地獄をツバメに見せつけた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ガラガラと何かが崩れ落ちる音。それがツバメの心に更なる絶望を味あわせるのだった。

涙が止まらず流れ出す。
ツバメは上を見上げた。

（もう、ダメかも。足はガクガクするし。腕も痺れてきてるし。何か臭いし。水冷たいし。もう、疲れたし・・・）

ツバメはその場にへたり、ユウキとともに倒れ込んでしまった。そして、人形のように、動かなくなった。
腕には、ユウキの足の血が染み込んで、固まってしまっている。

「ユウキ・・・」

ユウキはまるで眠っているように気を失っていて、天井から降り注ぐ水にうたれていた。その顔は、もう二度と笑顔になり得ないような気がして、ツバメはより一層恐怖した。

「ユウキ・・・ユウキ・・・」

ツバメは何度もその名を呼んだ。けれど、ユウキの目は開かない。

「ごめんね・・・うちが、あんなところで、転けたりするから」

自然と、涙は止まってしまっていた。それを望んだのに、ちっとも嬉しくない。むしろ涙をもってして、この状況を直視したくなかった。

「ユウキ・・・ユウキ・・・」

ツバメは、静かに目を閉じる。そして小さな両手で、小さな顔を覆った。体が、小刻みに震え始める。

自分が、ユウキを殺してしまうのだ、という罪意識に苛まれた。
もう、死んでしまいたいほど辛い。苦しい。

「もう、嫌だよ」

何も見えない黒色の世界で、ツバメはプカプカと涙の水たまりに浮いていた。そして、目を瞑って、その中に、潜った。
手をかいているわけではない。足をバタつかせているわけでもない。それなのに、不思議と沈んでいく。
不安定な心が、マイナス方向へ落ち着いた気がした。
どこまで沈むのだろう。
底には何があるのだろう。

「ごめんね・・・。ユウキ。うち、アンタを救えそうにないよ。本当に、ごめんね・・・。ごめんね・・・」

沈めば沈むほど、辺りは暗くなった。もう、自分が進んでいる方向も分からない。自分が何をしているのか、そもそも自分とは何なのかすら分からなくなった。

「ユウキ・・・」

真っ暗な視界の中、ふと現れたのは、ユウキの姿だった。ちょっぴり腰抜けだけど、うちにとって大切な人。
かけがえのない人。

ーーーーそうか。

涙の発生源はそこにあった。うちの中にいるユウキの足下から、泉のように溢れ出ている。

幾つものユウキとの思い出が、横を通り過ぎる。どれもくだらないことだけど、うちが生きていく上での必要不可欠なエネルギー。
ユウキは、笑っていた。
涙の中なのに、笑っていた。
その笑顔にツバメの心は奮え、眠りかけていた感情が目を覚ます。それはとても脆くて、儚いもの。けれど、暖かくて、柔らかくて、とても優しいもの。
そして何より、大切って思えるもの。
表も裏もない、善も悪もない、正や虚だってないそれに、ツバメの心は呼び起こされた。
そして、ツバメはユウキの手をとり、涙の水面を目指す。徐々に明るくなっていく世界で、ツバメは心で呟き続けた。

ーーーーまだ、可能性はゼロじゃない。

うちがいつもそうやって思えるのは、ユウキがいるからだ。
どんなに辛くて、挫けそうになっても、ユウキがそこにいてくれたから。
いつだって、ユウキがうちに力をくれた。今だってそうだ。ユウキがうちを救い出してくれた。道を指し示す一筋の光となってくれた。
ほんとは気づいてる。アンタが家で泣いてたことも。怖いＤＶＤを一日中見ていたことも。必死に勉強して、うちと同じ高校を受験しようとしていたことも。
ユウキは、うちのことどう思ってるのだろう。
たくさんユウキを見てきた。それはもう小さい頃から。
負けてばっかだったけど、負けず嫌いな人。未来をいつも見据えていて、その努力を惜しまない人。
そして、うちを強くしてくれた人。

ーーーうちはユウキに、何かをあげられてたかなぁ。

もしかしたら、ユウキはうちのことなんて、どうも思ってくれてないのかもしれない。それでも、頑張るユウキの姿を見れるだけで幸せなんだ。

なのになんで、いつも意地張ってしまうのだろう。

ほんとはもっと素直になりたいんだけど。

ダメだね。

うちはやっぱり不器用だ。

「ユウキ・・・」

他の男子と付き合った時も、アンタは別にどうでもよさそうだった。

どんなに頑張って良い成績を取っても、誉めてくれなんかしなかった。

いつもいつも、チビだって、からかってきた。

アンタから、この気持ちに気づいてほしかった。

「ユウキ・・・」

助かるかどうかなんて分からない。それでも、何かしなくちゃ。

またユウキに笑ってほしいから。

またユウキの頑張る姿を見たいから。

また窓辺で、二人で話したいから。

「ん、しょっ！！」

ツバメは勢いよく立ち上がって、ユウキを背負い、また歩きだした。階段へ向かい、一歩一歩、重苦しい足取りで進む。ツバメの細

い足は今にも折れそうだった。それでも、僅かな可能性を信じ、前進した。

「でやっ！！」

鉄のドアを蹴り飛ばす。ユウキの全体重を支え、階段を降りた。水で足下が滑るため、細心の注意を払わなければならない。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

ツバメは明かりの消えかけた階段を、ゆっくりと、しかし確かに下りていた。

鼓動が激しくなるのが分かる。度々聞こえる、崩壊の音。それは紛れもなくビルの上部分が崩れている音だった。

「あと・・・五階」

階段の一段一段を踏みしめる度に、両足に痛みが走り、膝と腰が砕けそうだった。階段の一番上から階段を見下ろせば、まだこんなにあるのか、と思う。けれど、進むしかない。

「・・・ツバ・・・メ・・・？」

「ユウキ！！」

ユウキは目を少し開き、朦朧と霞む世界の中で、ツバメの名を呼んだ。

背負われている自分を自覚し、ツバメの荒い息と熱を帯びた背中

に気づき、ユウキは自分を情けなく感じた。

「ごめん、な。ツバメ」

「いいの。大丈夫だからっ！　足の五本や六本くらいどうってことないの！　アンタはうちにまかせておけばいいの！！」

「あれ・・・？　レンジ、は？」

ツバメはドキンとした。しかしそれでも、ちゃんと伝えねばならない。今の、絶望的な状況を。

ツバメはユウキに、事の全てを話した。自分が転けて、エレベーターに乗り遅れて、コンクリートが落ちてきて、レンジを先に行かせて。

勿論、レンジは最後まで自分の提案には反対していたことも話した。

「そ、か・・・。ごめんな。俺のせいで、転けさせちゃって」

「そんなのっ！！　うちが、馬鹿だったんだよ。最後の最後で気を抜いて・・・。それで、こんな・・・」

「そんなことない。それに、辛かっただろ？　レンジを先にいかせるの」

「・・・・・・」

ツバメは何も言えなかった。本当にそうだったからだ。でも、辛かったなんて言ったら、またユウキに謝らせることになってしまう、そう思って何も言えなかった。

話題を変えるため、ツバメは無理してお腹から声を出した。
「確か、エレベーターは、この四つ下の階だったから、もう少しの辛抱だ！」
「ツバメ・・・」
「そうだ！　ユウキ、外に戻れたら、まず何したい？」
希望の話をする。悲しい気持ちにならないように。ユウキが謝らないように。
なるべく死を間近で感じないために。
「そう、だな。やっぱ、バッセンかな」
「ははっ、やっぱりね」
短い笑い声が響いた後、すぐに沈黙が訪れた。
炎が燃えさかる音や、小さな爆発音、岩が砕かれたかのように鈍い音。それぱかりが二人の耳に入った。
「じゃぁ、うちはね・・・」
「ツバメ」
ツバメが恐怖を紛らわせるために発そうとした言葉を、ユウキはいつもより少し低い声で遮った。
「無理、しないでくれ」

「え、え。な、何が・・・？」

なんで分かるのだろう。

うちはユウキにバレないように取り繕ってたのに。

「ほんと、ごめん」

でも、肝心なことは分かってないみたい。謝られることが一番辛いんだよ。だから、これ以上謝らないでよ。

そう言いたいのに、なんで言葉が出ないんだろう。

それは、きっとうちが。

涙を、堪えているからだ。

「顔は見えないけど、泣きたいことくらい、バレバレ」

本当に、何でもお見通しなんだね。

本当は今にも泣きたいんだ。

「ツバメ」

「・・・・・・」

「その、なんだ・・・」

ユウキは言葉に詰まった。これから言うことは、多分自分にとって最後の言葉になると思う。でも、それでも良いと思えた。この二文字が最後の言葉ならば、悔いはない。

こんな状況だからか。こんなに勇気が出るのは。

ムードもへったくれもあったもんじゃない。

それでも、多分今でないと駄目なんだ。これから俺がすることを

お前が聞いたら間違いなく反対するだろうから。

「えっと、ごめん。んで、ありがとう」

「どう、したの・・・？　急に」

ユウキは頭をツバメの耳元に近づけた。
そして呟く。
喉に挟まっていた、大切な二文字を。
たくさんの思い出をその空気の振動に乗せて。

「ツバメ・・・。好きだ」

「っ・・・！！」

ツバメの瞳から涙が流れ出た。それは止めどなく溢れた。
涙の水かさは上昇し、どこまでも上へ、それに浮かんでいるツバメを連れていった。
大粒の涙がいくつもユウキの左手の甲に落ちた。そして、青白い光によって、ツバメの涙達は輝く。
ほどなくして『ユウキ』は気を失った。

（憑依・・・成功！！）

ツバメはユウキに、もう少しの辛抱だと言った。
しかし、四つの階が、もう少しである訳がない。ましてやフラフラの身で。
ツバメが強がっているのは、ユウキにはすぐ分かった。

ーーーーきっと、助からない。けれど。

もうすでに火の手がそこら中に回ってきてしまっている。黒煙も息が噎せ返るほどに上がり、鼻に刺さる匂いもすごい。
ユウキは助かる術を模索していた。
そして答えは意外と簡単に出た。

ーーーー俺が、ツバメになれば。

それがユウキの導き出した答えだった。
ツバメは陸上部のエースで、レンジよりも速く走れる。だから、自分という重りがなければ、遙かに助かる可能性は上がる。そう考えたのだ。
だから、人生初の告白が最後の言葉。
俺を置いていけなんてツバメに言えるわけがない。レンジとのこともあったばかりなのに、そんな残酷なことはできない。
しかしツバメに憑依すれば、ツバメの了解に関係なく、自分だけを置いていける。
確かに怖い。一人でここに残されて、死を待つのは。
でも、それ以上にツバメが自分のせいで死ぬのだけは嫌だった。

「ツバメ、辛かったな。もう、楽してくれな」

空気は淀み、陽炎ができるほどの熱があった。上の方には、扉から漏れてきた火焔の赤色が、白い階段の壁を黒に変えている。

「次は、俺がお前を運ぶよ」

俺はお前に出会えて良かったよ。世界にはもっと良い人がいるとか、そんな人達に出会っていたらとか、そんなの知らない。
ツバメに、唯一無二のお前に、出会えて良かった。

ツバメには、本当にいろんなことをもらったから。
可能性がゼロのことなんて、きっと無い。そう信じてれば、諦めることなんてない。ツバメが俺を置いていこうとも、俺は諦めるつもりはない。助かる可能性は皆無かもしれないけど、最後まで生きて、もがいて、お前を追いかけるよ。
明日は明日の風が吹くならば、昨日は昨日の風が吹いていた。そう気づかせてくれたのもツバメだった。
だから、お前を信じて、お前との思い出を信じて、自分の過去を背負って、そして、自分を信じて。

ーーーー俺は、お前に何かをあげられてたかなぁ。

きっと昔の俺が見たら驚くだろうな。こんな勇気をくれたのも、ツバメ、お前なんだよ。
本当に、ありがとう。

（ツバメは、こんなに重いのを、ずっと背負って・・・）

ユウキに、ツバメの痛みが伝わった。足は今にも崩れてしまいそうに痛み、両腕は痙攣しているみたいに震える。
ユウキがとり憑いたツバメは、ユウキの体を階段に置いた。

（胸が、熱い）

通常、憑依された対象の意識が術者に干渉することはない。
そのはずなのに、ユウキは今までにないほどに胸が熱くなっていた。

（ツバメ・・・ツバメ・・・）

ユウキの心を持ったツバメは走り出した。決して振り向かずに。
階段を三段抜かしで下り、ラスト五段は飛んだ。
軽快な足取り。ある程度足は痛むけれど、それでもツバメの足は速かった。

（ツバメ・・・ツバメ・・・）

今まで味わったことのない快走感。これが屋外だったら気持ちいいだろうな、と思い、無我夢中に駆けた。
息もあまり乱れない。転けそうになっても、すぐに立て直せる。
視界はいつもよりも位置が低くく、結わえた髪は揺れるが、そのような些細なことは有って無きが如しだった。

（ツバメ・・・ツバメ・・・）

なぜだかは分からない。けれど、ユウキの視界は滲み、階段を踏み外しそうになる。

（くそ、止まれ）

頬を伝わる暖かいもの。
なぜだろう。
自分の身が死ぬのが怖いのか。
ツバメの答えを聞かずに憑依したのがそんなに悔しいのか。

（きっとこれは俺と、ツバメの・・・）

確信は無い。それでも、ユウキにはこれが二人の涙だと思えた。
そしてそれが、今の自分を突き動かしている。
ツバメが、心を包んでくれている。

ユウキは足を更に速めた。

「ひっ・・・ひっく・・・くそっ。止まらねぇ・・・。止まらねぇ・・・」

幾つもこぼれ落ちる大粒の涙。それは拭っても拭っても、袖を濡らし続けた。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

「遅いな。あいつら」

アンザイは外でビルを見上げた。

ビルの上層部分の窓はほぼ全て割れ、そこから煤煙が空に上っている。爆破された部分は跡形もなく吹き飛んでいた。

周りには救急車と、珍しいもの見たさに野次馬達が来ていた。

「アンザイ・・・」

「レンジ、おとなしくしてろ」

レンジは脱出し、今は救急隊員に手の治療を受けている。今は大人しく担架の上に座っているが、ここに至るまでは大変だった。

エレベーターを出ても、いつまでもそれに縋り、泣き叫んでいたのだ。医療班が無理矢理レンジを引っ張り、落ち着かせようとした。

レンジはそれを力づくで振り払い、再度エレベーターに駆け込み、上へ向かうボタンを連打した。しかし、それはまったく反応しなかった。なぜなら、上へ向かわせるだけのエネルギーが、失われてい

たからで、下へ向かうことだけできていたのだ。オタク達も同じように救出のために上へ向かおうとしたが、それが出来なかったのもこのためだった。
レンジは泣きつかれ、茫然自失の抜け殻状態になり、今は大人しく治療を受けている。
そこへカナさんが、どこか申し訳なさそうに現れた。

「すみませんでした。私の握手会のせいで」

「・・・別にあんたのせいじゃねェ。気にすんな」

カナさんは、ありがとうございます、と呟いた。無理に微笑んだせいで、頬についたガーゼが取れそうになる。

「それとあの、ハセガワ・・・いえ、クロカワを知りませんか？」

「・・・知らねェな」

本当は知っている。救急車で近くの大学病院に連れて行かれたのだ。レンジの頭はユウキとツバメのことで頭がいっぱいで、ちゃんとした返答をすることが面倒になっていた。この事件の発端となった人物に関すれば尚更だ。

「そう、ですか」

アンザイがサングラスの縁を持ち上げてかけ直す。その二つの遮光板には、暢気（のんき）に沈む、綺麗な夕日が映っている。

「カナさん」

「あ、はい」

アンザイが手をポケットに収め、カナさんに話しかけた。

「あなたにとって、彼がハセガワならば、それでいいんです」

「え・・・？」

「あなたの世界でハセガワという人物が生きていたのは事実。だから、これからもそうしていられるはずだ。決してクロカワなんて、言い直すことはない」

「そういう・・・もの、ですかね」

「そういうものですぞぉー！！」

オタク達が一斉にカナさんの後ろから飛び出し、叫んだ。そしてアンザイを指さして。

「その台詞、『マジカルゲッチュー』の第四十二話で、ハーリーマソンが山田中島ヶ原之上ケンタウロスノジロウを勇気づける時に使ったやつですねぇ！！」

「あっ、分かる？」

「分かりますとも！！　確か、記憶喪失になった山田中島ヶ原之上ケンタウロスノジロウの人格プログラムに新しくつけられた名前を否定するとこですよね！！」

「あれ、良かったよなぁ」

「アンザイッ！！」

レンジが叫び、その場の空気は凍りつく。

「まだ、ユウキとツバメが来てないんだ。なのに、ヘラヘラ笑いやがッて。ふざけんな」

「・・・・・・」

アンザイは何も言わなかった。何かを言おうとしたが、途中で言うのを止める。オタクはすごすごとその場から立ち去り、カナさんもその場からはなれようとした。

その刹那に、何者かの影がレンジ達の元へ伸びてきた。

その影は、周りの人たちよりも人一倍小さい。しかしその影の黒色は、他の影より色濃く見えた。

「え・・・。ツバメェッ！！」

「あっ、ちょっと！」

救急隊員の治療を強制中断し、レンジは今にも倒れそうなツバメの元へ走った。

ツバメの顔はところどころ炭で黒くなり、熱を帯びている。膝には血が流れていた。

ツバメは腹に手を置き、息を整えようとする。

「レン・・・ジ・・・」

「ツバメッ！！　ダイジョブか！？」

しかし、そこにはユウキの姿がない。一向にしてユウキがビルから飛び出す様子もない。

「ユウキは、うちを、うちだけを先に行かせたの。うちは、それを、どうしても、断れなく、て・・・」

「ツバメッ！！」

ツバメはその場に倒れ込んだ。即座に救急隊員が詰め寄り、ツバメを担架で運んだ。

レンジは立ち尽くし、こうこうと輝く夕日すら目に入らなかった。

「そんな・・・ユウキが・・・」

「・・・・・・」

アンザイはレンジの横につけ、その頭を撫でた。

「大丈夫。あいつなら、助かってる」

「そんな、そんな確信・・・ないだろ？」

「大丈夫だ。あいつを信じろ」

アンザイは、涙を流すレンジに、大丈夫だ、安心しろ、と気休めにしかとれない言葉だけをかけた。

１４／１５　グライヒ、相求む

「報告します。今回のサクランビル爆破事件ですが、爆弾はビル内にあったものらしく、不正な輸入などの可能性があります。これに関しては順次追及していくつもりです」

「そうか。ビルの状況は？」

「はい。サクランビルは二十階から四十階は半壊。うち上五階はその損傷が著しく、全壊に近い状態です」

「怪我人の方は？」

「はい。ビル外においてですが、ガラスの飛散などで怪我をした者はゼロ名です」

「ビル内は？」

「はい。軽傷者八名。負傷者十一名。重傷者三名。死亡者・・・」

「・・・・・・」

「ゼロ、です」

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

（どこだ、ここは・・・？）

目をゆっくり開く。視界に入るのは真っ白な天井と、分散したライトの彩り。あまりの眩しさのために、目を完全に開くことができない。

（俺は・・・生きてる、のか・・・？）

右を向く。花瓶の向きからして、自分が横になっているだろうことに気づいた。

体を動かそうとすると、まず足に痛みがくる。額に包帯を巻かれ、頬のガーゼを貼り付けているセロテープが少しうっとおしい。

「やっと起きたか」

「この声は・・・アンザイ・・・？」

「ここは、病院だ。ったく、何時間寝れば気が済むんだ。もう夜中の二時だぞ。土曜の」

一瞬天国かと思ってしまっていた。しかし、ユウキが辺りを一様に見回すと確かにここは病院らしく、他の患者のベッドがないため、個室のようだ。

アンザイが、ユウキのすぐ右横で本らしきものを片手に、パイプ椅子に座っている。アンザイの後ろには窓があり、幾千もの星が夜空を彩っていた。

「・・・・・・」

「どうした？」

「なんで・・・だ・・・？」

「・・・なんで生きているのか」

ユウキはまだ半覚醒らしく、ぼんやりとしか世界を眺めていない。しかし、次のアンザイの言葉で、ユウキの目は完全に醒めるのだった。

「憑依術を使っていたのに、か？」

「っ！！　アンザイ、なんで・・・それを・・・！？」

アンザイは本を置き、ゆっくりとサングラスに手をかけた。そして、そのサングラスを、はずした。

「憑依能力者が、お前だけだと思うなよ」

「う、嘘だろ・・・？」

アンザイの瞳は真紅で、太陽の紋章があった。梅野（ばいの）一族とは違う形。けれどもそれは確かに憑依能力者を示す紋章だ。

ユウキはあまりの驚きに、痛みを忘れて上半身を勢いよく起こした。

今までまったく気づかなかった。ただでさえ真っ白な頭に、さらに白の絵の具を塗りたぐったような気がする。

「なん、で、お前がそれを・・・」

「俺は特異体質でな、遺伝的なものじゃないが」

アンザイは最初から知ってた。ユウキが憑依能力者だということを。

「うめのと書いて、ばいのと読む。そうそういる姓名じゃないからな。梅野一族は憑依術じゃ有名どこだ」

「そう、だったのか・・・」

「お前、ツバメに憑依してあいつだけを逃がしただろ」

「・・・仕方なかったんだよ。ってか、なんでそんなことまで知ってんだ？」

「お前、走り終わったらすぐ腹に手を置く癖あるだろ？　ツバメがビルから出てきた時に同じことをしていたからな。というよりそもそもツバメは走り終わったらいつも脇腹を押さえるし、息遣いも歩き方もユウキぽかったからな」

ユウキは流石、陸上部顧問だと思った。自分でもあまり自覚のないところまで見ている。部員が少ないからそこまで目が行き届くという解釈もあるが。

とりあえずユウキの頭は驚愕の事実と今の現状を整理し続けた。そして、最も大事なことに気づく。

「じゃあ俺は、どうして助かったんだ・・・？」

「簡単なことだ。俺がお前に憑依してたんだよ」

それを聞くと、なぜか当たり前のように感じた。しかし、それではところどころに矛盾が生じる。

「遠隔憑依と分身憑依の併用だ」

遠隔憑依は直接触れなくても憑依できる術。

分身憑依は意識を等分するため、意識の一部を術者に残したまま対象に憑依できる術。

「で、でも！　憑依したところで、俺の足じゃ、歩くことすら・・・！！」

「忘れたのか？」

アンザイは立ち上がり、窓を開けて満天の星空を見上げた。そして、すぐに振り向いてユウキを見下ろしてニヤけながら言った。

「俺は日本一の手すりスベラーだぞ」

「・・・は？」

ユウキは妙な説得力と視線に圧されてしまった。今までアンザイの瞳を見たことがなかったからかもしれない。

「カナさんの握手会だ。事前に下調べはしている。だから知ってたんだよ。外についてる非常階段のこともな」

「約二十階分を、足をつかずに手すり滑りしたって、こと・・・か？」

「・・・さぁな」

何とも微妙な空気が辺りを包む。アンザイが本当に全部手すり滑りしたのか、途中でエレベーターを使ったのかも分からない上、アンザイがそれをはぐらかした理由も今一知れない。

しかしユウキは、今はそんなことはどうでもよいと思えた。

きっとアンザイも辛かったはずだ。足の痛みに耐え、自分の代わりに死の恐怖に立ち向かった。

「非常階段にたどり着くまで匍匐(ほふく)前進だったからな。お前の体を少なからず傷つけてしまった。そのことはすまない」

アンザイは頭は下げずに謝った。謝りたいのはユウキの方なのにも関わらず、普段のアンザイとは思えないほど謙虚であった。

「んなことはどうでもいいよ。それより・・・ありがとな。アンザイ。ほんとに」

「ふん。礼ならいらない。というか、いつも気になっていたが、教師を呼び捨てってどうなんだ」

アンザイはサングラスをかけ直し、再び椅子に腰掛けた。そして足を組んだ。

「あとついでに言っておくが、クロカワも憑依能力者の可能性がある」

「えっ！？」

「あいつ、ヘリコプターが初め来た時、一瞬立ち眩みを起こしただ

ろ？　あれ、俺がクロカワに憑依しようと術を掛け続けていたからなんだが、どうも上手くいかなくてな。クロカワ自身、術こそは使えないものの、憑依術の精神訓練は積んでいたからだろう」

「そう、だったのか・・・」

（目に見えないとこで、そんなことが・・・）

今回の一件でユウキはアンザイを見直した。というよりも百八十度、別の人間に見えた。

「ところでアンザイ、なんでサングラスなんだ？　紋章隠すためならカラコンとかでもいいんじゃないか？」

「紋章は光るだろう？　カラコンではその光を防ぎきれない」

「なるほど」

「・・・それと、この話は、当然秘密だ。分かってるな」

ユウキは、はいよ、と二つ返事で返した。

その時、ノックの音がユウキの部屋に転がりこむ。そして、扉が開いた。

「アンザイ、ユウキ起きたァ？　ってユウキィ！！　目ェ覚めたのかァ！？」

「レンジ、痛ぇ」

「うわあァァッ！！　ユウキィッ！！　生きてて良かッたァッ！！」

「レンジ、痛いって」

レンジはせっかくの美貌を、醜い泣き顔にして走り、ユウキに飛んで抱きついた。

見ると、その後ろにはツバメとキリヤの姿。

ユウキはツバメと目が合った瞬間、頬を赤らめて目を逸らしてしまった。しかしそれはツバメも同じのようで、ユウキは少し安心した。

ツバメのことを考え、レンジを振りほどこうとしていると、キリヤがユウキの目の前に立った。

「本当にすまない。ユウキ君」

「あ、いえ」

（確か、キリヤだっけ）

キリヤは深々と頭を下げた。その体は震えている。

キリヤも、ひどい怪我をしているにも関わらず、松葉杖で自分を上手に支えながら顔を下に向けている。

「謝ったくらいで許されるわけないことは分かっている。医療費だって勿論出すつもりだ」

キリヤが辛そうな顔で謝罪していると、レンジがユウキの耳元で、キリヤに聞こえないように囁いた。

「ユウキ、キリヤさんな。ああやッて、ビルにいた人全員に謝ッてんの」

「・・・そう、なのか」

ユウキはレンジの言葉を聞き、キリヤさんは本当に良い人なんだ、と思った。

「キリヤさんは、この後どうするんですか？」

「事情聴取のときに、全部話したよ。俺のされたことも、してきたことも。全部。だから、俺はこの後牢屋行きさ」

事情聴取を受けていないのは残りユウキだけだった。

キリヤは一頭最初にされ、包み隠さず全て話したそうだ。勿論そこでキリヤは逮捕されるはず、だった。

「だけどどうしても、皆さんに謝りたくて、少しの時間をもらったんだ」

そう簡単に犯罪者が野放しにされるわけはない。

キリヤがこうして時間をもらえたのは、ビルにいたオタク達や関係者がキリヤの逮捕を強く反対したからだった。

「さて、と、ユウキも起きたことだし。俺はちょっと出るかな」

「あッ、俺も！　ほらァ、キリヤさんも行こうぜ」

「え？　あ、あの」

アンザイは不自然に、そしてわざとらしく言葉を残し、立ち上がった。歩きだしたアンザイを追うようにレンジも外に出る。そして

半ば強引にキリヤさんも連れ出した。

「じゃァ、ごゆッくり！！」

気づけば、病室に残されたのはユウキとツバメの二人だけとなった。

１４／１５　グライヒ、相求む（後書き）

いよいよ次回で最終回です。最終回はハッピーな曲を聴きながら読むといいと思います。（個人的にですが・・・）

15／15　シアワセ満面

お互い見つめ合い、少ししたらまた目を逸らす。二人は顔を真っ赤にして黙り込んだままで、時計のカチッ、カチッという音だけが部屋に響いた。

「あ、あの、座れば？」

最初に口を開いたのはユウキ。

ツバメは沈黙を保ちながら、頭を一瞬上下させて承諾の合図をする。そして、アンザイの座っていた椅子に座るが、チョコンという擬態語が一番しっくりくるその座り方は、ユウキの頭をクラクラさせた。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

再び沈黙。

（こういう時って何話せばいいんだ！？）

確かに嬉しい。嬉しいけども、それ以上に恥ずかしい。

ツバメが告白のことを全て忘れていたならば、こうはならないはずなのだが、どうも見る限り、全てはっきり、明瞭に、明澄に、鮮明に、そして確かに、覚えているようだ。

「え、えと、その、体は、どうっ・・・どう、なのよ」

ロボットの言葉のように歯切れの悪いツバメのそれは、『どう』のところで一度裏返り、フラッフラの状態でユウキの耳に届いた。

「その、生きてはいる、かな」

「何それ」

自分でも自分のことは分からない。もしかしたら一生歩けないとか、そういうところまで重傷なのかもしれない。ただ、医者とは話していないから、確信がないだけなのだ。

曖昧な回答に、ツバメは目を訝しげに細めて、そしてすぐにそれを丸くした。

「でも、生きてて、ホントよかった・・・」

「うん。俺も、お前が生きててよかった」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

再び沈黙。

（こういう時って何話せばいいの！？）

ツバメはそう思った。きっと同様のことをユウキも考えているのだろうとも思う。窓辺での会話の時は、止めどなく話題が頭の中から溢れるが、こういう畏まった場所での会話は少し二人には不向き

な気がした。

「あっ、そだユウキ・・・。ごめんね・・・。置いていったりして・・・」

（ああ。そういえば、そういうことになってんだっけ）

ツバメは、ユウキが一人でビル逃げたと思っている。つまりそれは、ツバメがユウキを置いていったということ。

本当のことを話すにはまだ早い。

もしかしたらこの先、ツバメと結婚できたならば、自分の特異な能力を打ち明けねばならないが、でもそれは、二人が一生を共にすることを誓ったときの話だ。だから、今はまだ話せない。本当の事実は、まだ。

「そんな、俺が言ったことだし。お前は悪くないよ」

「で、でも、ホントに、ごめん・・・。うち、どうかしてたよ」

ツバメは俯いたまま固まった。そして、震えだしてしまう。

また、涙を流しそうになった。

けれど、そこにはユウキがいる。生きている、ユウキがいる。

ツバメの涙の元栓をしておける、たった一人の、ユウキがいる。

だから。

「・・・大丈夫だよ」

初めからこうしたかったのかもしれない。図々しいけど。

一番これが暖かいと思う。恥ずかしいけど。

こうすることが正しいって思う。照れくさいけど。

「な、な・・・！？」

ユウキはツバメを抱き寄せ、ツバメの頭を自分の胸に押しつけた。

「ユユユ！？　ユユウキ！？」

「大丈夫だから。生きてるから」

椅子は倒れ、ツバメは完全にユウキに体を預けてしまった。

急に男がこんなことをするのは、言語道断かもしれない。女にいきなり抱きつくなんて厚かましいかもしれない。

しかし、ツバメはユウキを拒まず、しばらくゼロ距離のままいた。

布越しに伝わり合う二つの熱。それはとても熱く、異様に寒い今夜にはちょうどよかった。

「あ、え、えと、その・・・」

（うちはどうすりゃいいのよ・・・）

「・・・・・・」

（やべー。勢いで抱きしめたけど、この後どうしよう・・・）

二人の鼓動のリズムが徐々に上がっていく。それに比例して、体が熱くなった。

「お、俺はさ、今こうやって生きてる。だからその、もうごめんとか、言うなよ」

「で、でも・・・」

確かな温もりがここにはある。

ユウキはツバメを抱き直した。

「・・・えっとね、うちね・・・心配、だったんだ」

ツバメがユウキの胸に顔を埋めながら、弱々しい声色で言葉を発した。

「だから体の心配ならいらないって」

「それもあるけどさ。ユウキが無事だって聞いて、その、ユウキを置いていったりして、うち、ユウキに嫌われたんじゃないかって、ずっと心配だったんだ」

ユウキは幾度となくそう思ったことがある。俺って嫌われてるんじゃないか、とか、喧嘩しちゃったよどーしよー、とか。だから痛いほどツバメの気持ちが分かった。

そして、そういう気持ちの人には、どう声を掛けるべきなのかも分かっていた。

「うちね、ほんとはお見舞いに来ないつもりだったの。面目ないというか、合わせる顔がないというか。でも、レンジがどうしても来いって言うからさ」

人が人に対して不安を抱くとき、大切なのは優しさと、少しの強引さだとユウキは思う。でも、自分より一枚上手の人間には優しさだけで十分だ。

「大丈夫だよ。俺は、見捨てられたとか、置いてかれたとか、思ってないから。だって、俺が言い出したことだしさ。謝りたいのはむしろ俺なんだ。あんな辛い決断をさせちゃって、すまん」

「・・・何か、今日のユウキ優しすぎて、逆に気持ち悪い」

「ええっ！？」

人がせっかく優しくしてやっているのになんだこいつは、とユウキは思った。

しかし、本心から気持ち悪いと思っているならば、この両手を払いのけるだろうとも思っていた。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

再び沈黙。ユウキの胸には、ツバメの体温が感じられる。それはとても暖かく、心地よく。

「ユウキ。もう、少し、このまま、で・・・」

「・・・うん」

それからどれくらい経っただろうか。時計を見ると五分しか経ってない。しかしユウキにとってその五分は、数学の授業よりも長く感じた。

ツバメが抱きしめているわけではないから安易に動きづらい。そうやって緊張もするが、どこか落ち着くものもある。

「ユウキ、うちね、うちね」

「ん・・・？」

ツバメはおもむろに口を開いた。恥ずかしそうに、顔を赤らめて。だけど、その口元は微笑んでいて、どこか、シアワセそうだった。

ツバメは微笑んでいる。ユウキも微笑んでいる。

ここには今、シアワセな時間が流れている。

「うちね、その、ユウキが・・・」

ツバメの、大きく開いた目は潤んでいた。

瞳にユウキの姿がくっきりと像をむすんだ。

バクンバクンと高鳴る心音。血走る眼球。背中を伝う汗。

ツバメも同じ状態であったことは、ユウキは知る由もない。

「ユウキのことがっ・・・」

「下を～見てごらん。綺麗な花だね～。上を～見てごらん。鳥達の群だね～」

裏返ったツバメの声に被さるようにして、何やら歌声が。

どこかで聞いたことのある声の特徴。その歌声は一つではなく、男と女のデュエットのようだ。

さらにギターの音も聞こえる。ジャカジャカと、ゆったりとしたリズムをつくり、奏でていた。

「手を広げてごらん。気持ちの良い風だね～。手を掲げてごらん。眩しい月だね～」

「何なのっ！？　このクソ良い時に！！」

ツバメはユウキの両腕をどかし、憤慨しながら勢いよく音のする方、つまり外の方を確認するため窓を開け放った。

刹那、ツバメは固まった。

「ツバメ・・・？　どうか、し・・・うわあっ！」

「す、すごっ！！　ちょっと、ほら、よく見てよ！！」

ツバメはユウキの右手を取り、強引に窓の外を覗かせた。その勢いで足を主として体の節々が痛む。ユウキの下半身に掛けてあった布団はベッドから落ち、ついでにアンザイが置いていった本も床に転げた。

しかし、外の景色を見た瞬間、そんなことどうでもよくなった。ユウキの視界に飛び込むのは、まるで地獄絵図の正反対の光景。

まさに、天国絵図だった。

「っ・・・！！」

「すごーいっ！！　すごーいっ！！」

春なのに、雪が降っていた。

その雪は、星のようにキラキラ輝いていて。

「おっ！！　ツバメちゃんだっ！！」

「ツバメちゃーんっ！！」

向かいには別の病棟がある。その棟の全ての窓から、怪我したオ

タク達も、握手会の関係者も、そうでない人も、笑顔で窓から乗り出してこちら手を振っている。
みんな。みんなだ。
みんな、笑っていた。人ってこんなに笑えるんだって、思えるくらい。

「ユウキィ！！　ツバメェ！！　遅ェよッ！！」

二人が向かい病棟の方の屋上に目をやると、そこにはなぜかかき氷を持っているレンジとキリヤの姿。そして、その隣にはアコースティックギターを弾いているアンザイと、マイクを持ったカナさんがいた。

「この大地に生まれて～、なんとなく生きてきたけど～、失って～気づいたんだ。身近なものの大切さに～」

「何なのこの歌は」

「『マジカルゲッチュー』の何か、じゃないか？」

アンザイとカナさんの歌声は、マイクを通じ、屋上にあるスピーカーで増徴されていた。それに負けじと幾重にも重なるみんなの歌声。

「じゃぁ、この雪は？」

「あれ、じゃね？」

ユウキが指さす先には、レンジの横にある妙に巨大なかき氷製造機。暗くて今一見づらいが、あれは確かに自動かき氷製造機だ。そ

して、さらにその横にあるのは、これまた妙にデカい扇風機と、舞台一つを照らせそうなライト。
かき氷製造機で小さな氷の粒子ができ、巨大扇風機でそれを上空へまんべんなく散らす。そしてそれをライトで照らし、光輝く雪の完成。

「ホントの雪みたいだな」

「花は君を～、彩るために～。鳥は君を～、導くために～。風は君を～、乗せてくために～。月は君を～、照らすための～、スポットライト」

地上に振る星屑。止まらない歌声。どこからともなく飛ぶ、看護師の怒気。それすらも楽しさに変える、満面の笑み。
いつまでも見ていたい幻想世界。
みんな、嬉しそうだ。あんな事件の後なのに。

「友は君を～、助けるために～。恋は君を～、暖めるために～。僕は君を～、支えるために～。君は君を～。君を～」

「すごいよ・・・。みんな、シアワセそう」

ツバメは降り注ぐアスタリスクを見つめながら言った。そして、握っていたユウキの右手を、より一層強く握る。

「ユウキ・・・」

ユウキもツバメの手を握り返した。

「うちね、ユウキが好きだ」

ユウキの頭の中は真っ白になった。そしてすぐに頭のキャンバスが明るく彩られていく。驚愕ではあったが、どこか自然にも感じることができた。そして、これがシアワセってやつか、とも思えた。
幾億通りある巡り会いの中で、こうやって自分をシアワセにしてくれる人に出会えたことは、本当の奇跡のように思う。

「・・・そっか」

それはツバメだけじゃなくて、レンジもアンザイもあてはまる。

「・・・そっかって何よ」

一体どのくらいなのだろう。シアワセと出会える確率は。
多分、それがゼロに限りなく近くとも、人々はそれを探すはずだ。探すのに疲れてへばっても、どんな声も届かなくなっても、そうなるのもシアワセを求めるが故。

「えっと、あのさ・・・」

人は独りじゃ生きていけない。だから支え合うのだと思う。もし、独りで生きていけたって、そんな人生絶対シアワセじゃない。シアワセのない人生なんて、死んでいるのと同じだろう。
死ぬのが嫌だから、本気で支えてくれる人を探して、本気で出会って、本気で助け合って、本気で悩んで、本気で生きて。
本気で恋をして。

「ツバメ・・・」

運命様の試練を幾つも超えて、やっとたどり着けた『今』がある。

恋って、こんなに大変なことだったっけ。
俺は、もっと簡単なものだと思ってた。告白して、承諾してもらえばそれでいいと思っていた。
でも、どうやら恋は至極複雑なものらしい。
これからまた試練が与えられるかもしれない。その時は、一人と一人で、じゃなくて、二人で、乗り越えていこう。
二人で、シアワセを見つけよう。

「俺も・・・」

背中に担いだ過去という名の重りが、軽くなった気がした。けれど、それは過去が無くなったからじゃない。

ーーーーツバメが、力を分けてくれたんだ。

「ツバメのことが、好きだ」

「I、m sure that～ you can love even itぃ～」

アホくさいメロディーも、自分達を祝福してくれるラブソングに聞こえて仕方がない。

「you can love even itぃ～ you can love even itぃ～」

ユーキャンラブイーブニットと、皆が歌い始めた。
ユウキもツバメも、そのメロディーを口ずさむ。
オタク達は一つの窓に何人も乗りだし、腕を頭上で左右に泳がしている。

さっきまで怒っていた看護師や、まったく関係ない患者も、医者も、オタク達と仲良く声を重ねる。
レンジはメガホンで叫び、キリヤも小さく口を動かす。
カナさんはとても綺麗な声でリードし、アンザイはそれにハモるように歌っている。

「ｌａぁ～ｌａｌａｌａぁ～　イェイイェイ　ｌａぁ～ｌａｌａｌａぁ～　イェイイェイ」

いつまでも、こんな時間が続いてくれたら。きっと皆もそう思ってる。
嫌な思い出がそれで塗り変えられるわけなんてないけれど、今はこうして皆で笑って、歌っていたい。

「ｌａぁ～ｌａｌａｌａぁ～ｌａぁ～ｌａｌａｌａぁ～　イェイイェイイェ～イ」

この先、今日の事件を思い出して辛くなっても、この思い出がある限り、すぐにそんなの笑い飛ばせる。
俺にとって、この思い出は、過去は、重りなんかじゃない。むしろ、その真逆の存在だ。
それは、まるで。

「羽根、かな。チキンだけに・・・」

「ん？　何か言ったユウキ」

「いや、何でもないよ」

春に降る雪と歌声は、途切れそうな夜をつなぎ止め、百幾つの心

と心を、一つにした。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

サクランビル近くにある大学病院で、二人の看護師が廊下を歩いている。

「はぁ～。喉痛いわぁ。昨夜はちょっと歌いすぎたかしら」

「看護師たる者、ハメをはずしてはなりません」

「婦長も来れば良かったのに」

「結構です。梅野さん、回診に来ました。あら？　妹さんかしら」

婦長が見たもの。

それは、互いに寄り添い合い、手を絡ませて眠っている、二人の男女の姿だった。

エピローグ

憑依能力。系統的に言えば、憑依術。

「・・・もしもし！！　もしもーし！！」

「聞こえてるよっ！！　何だよ！！」

「何だよじゃねェよ！！　もう子供生まれちまッたよ！！」

「ええっ！？　マジで！？」

憑依能力とは、術者が対象に直接触れることで術者の意識を対象に乗り移らせ、対象を術者の思うがままにコントロールできる能力。それは、対象に意識があろうとなかろうと関係なく、強制的に対象の意識を押し退けることができる。また、解除の際、術者の意識は距離に関係なく術者の体へと戻る。

「マジだよ、マジ！！　こんな大事なときに何やッてんだ！！」

「仕事なんだから仕方ないだろ！！　あ、ところでさ、ツバメ、怒ってる・・・？」

「怒ってるよ！！」

「うおッ！！　ツバメか！！」

シャーマンやイタコなどが扱う、術者の肉体に死者の精神を乗り移らせる降魔術とは少し勝手が違う。

「ったく、人に子供生ませといて、自分はお仕事かっ！！」

「だから、仕方ないだろ！！　通報が入ったんだから！！」

「もう・・・。ところで決めたの？　子供の名前」

欠点は、術者の意識は対象へと移ってしまうため、術者は術中、文字通り「気を失った」状態になってしまうという点だ。

「え、えっとぉ～、え～、その」

「決めてないの・・・？」

「いやいや決めてたよ！！　えっと、あ、そだ、ツバキ！！」

「ツバキ？」

「そう、ツバメのツバと、ユウキのキで、ツバキ」

「と・・・？」

「と？」

「双子だってこの前言ったじゃない！！」

また、この世には憑依能力を代々受け継ぐ血筋が存在し、今でも一般人と何ら変わりのない生活を送っている。

彼らは先天的に憑依能力の才を持つが、決して初めから完成されたそれを備えるというわけではない。精神力を高めることで憑依能力は向上、進化し、徐々に高度な憑依技術を覚えていく。

「え、じゃ、じゃぁ・・・。そだ！！　ユメ！！　男の子はツバキで、女の子の方は、ユメ！！」

「今度はユウキのユと、うちのメ？」

「おうよ！！　いい名じゃね！？」

「安直すぎてヘドロが出るわ」

「ヘドじゃなくて！？」

憑依能力には幾つか種類がある。生命体に憑依する「生物憑依」は憑依術の基本だが、その派生として、遠距離の対象に憑依する「遠隔憑依」や、複数の生命体に憑依する「多重憑依」、無機物に憑依する「非生物憑依」、意識を等分してその意識の一部だけを憑依させる「分身憑依」などがある。

ただ、利点の多い術ほど習得は困難であり、高い精神力を必要とする。難易度の高い憑依術を発現できないままに一生を終える者も少なくない。

「まったく。そっちも忙しいんでしょ？　さっさと仕事済ましてきなさいよ！！」

「了解！！」

今から七年前、春の麗らかなな日差しの中、一人の青年が憑依術

の基本である「生物憑依」を習得した。
そこから、一つの物語は始まり、そして終わりを告げた。

「今の状況は？」

「おおチキンソウルさんですか！！　あのベランダで泣いてる子です。火は初めよりは弱まりましたが・・・」

「大丈夫です。少し下がってて下さい」

その青年は大人になり、チキンソウルと呼ばれた。

「あの、イトウさん、なんでチキンソウルなんですか？」

「お前は新米だから知らないか。異名だよ。あの人、憑依能力が使えるんだ」

「ひょ、憑依！？」

「ああ。で、チキンソウルってのは、彼の妻がつけた名らしい」

「えぇ～、信じられねぇっすよ。そんなの。あっ！！　子供出てきた！！」

「よし、保護してこい」

今はその憑依能力を使って、かつて恩師がしてくれたように、火事場などで逃げ道が分からない人や、泣いて動けない子供を救っている。

「じゃ、俺はこれで！！」

「もう行ってしまわれるんですか」

「はい。今日は子供の、誕生日なんで」

ここから、一つの物語が、また始まる。
そしてこれからも、続いていく。

エピローグ（後書き）

完結です。

あとがきみたいなのを活動報告に書いておきましたので、できればお越しください。

とりあえず、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3253k/

恋するチキンソウル

2010年10月21日21時49分発行